化物らしく、人間らしく

照坊主

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

にじファンで投稿していたものです、駄文もいいところといったものなので不愉快になるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします

目次

チュートリアルみたいなもの ―― 1
徐々に増えそうな設定のようなもの 14
戦闘だ!! ―― 18
いろいろと面倒になってきたの ―― 30
泡沫の夢 ―― 42
血、怒声、戦場にて ―― 50
矜持と傲慢の違い ―― 60
顔合わせ ―― 69
食事の時間 ―― 80
能力は！成長する!! ―― 91
幕巻『狂人』 ―― 108
努力 ―― 116
新月には星がよく見える、そう、あの北斗七星の脇に（ｒｙ ―― 130
死ぬ者、殺す者 ―― 150
何度でも、繰り返す ―― 163

チュートリアルみたいなもの

始まりは何処だったろうか？
自らの才能に絶望したときか？それとも、優秀な姉を持ったときか？
憧れが醜く見えたときか？夢が理想へと変わったときか？
・・・なんのことはない、所詮は死ぬまでの暇つぶし・・・

ケ・セラ・セラ（なるようになる）

「ってなことを考えていた時期があったんだよ」
満月の月夜の下、安酒飲んで愚痴る男と愚痴を聞く男が一人
「そりゃ若いときに賢い連中がかかる病気みたいなもんだよ、旦那」
昔考えていた黒歴史的なことを屋台のおっさんに愚痴る俺、それを真面目に聞いてくれる屋台のおっさん、通称『大将』
「大体なんだよ『始まりは～』って・・・んなもん生まれた時からに決まってんだろーが」
「まぁ、生まれたからにゃ生きなきゃ仕方ありませんがねぇ」
「だよな～・・・なぁ～にが『死ぬまでの暇つぶし（キリッ』っだぁ～・・・あほか!!」

「まぁ、この前来た若い役人さんも『男として生まれた意味はなんだろうか』なんて意味深な顔して言ってましたがねぇ」
「やぁ～まぁ～こっぱずかし～ねぇ・・・大将はなんかあるかい？生きる意味（笑）ってやつ」
「あ～・・・屋台引いて旦那のような人の愚痴聞くことじゃねぇですかい？俺にゃあそんぐらいしかできませんよ」
「なるほどなるほど、そりゃいい、どんどん聞いてくれ」
「と言っても、旦那はそろそろお帰りでしょう？」
「お？」
「金が無くちゃ酒は呑めんし、飯は食えんでしょう？」
　そういい大将は卓の上にある空の革袋を指差す
　なるほど、確かにもう使い切ったようだ
「その通りだな・・・ってなことでお暇させてもらうかね」
「はい、また来て下さいよ」
　屋台の席を立ち元来た道をぶらつく
　ここはいいところだ、夜でもにぎやかだ、こんなろくでなしでも酒がうまく呑める
「本当にいいところなんだがなぁ・・・」

いいところだが、治めてる人間が問題だ
「・・・子孝か?」
後ろから声がかけられる、懐かしい声だ
「なぜ・・・お前がここに・・・」
「久しいねぇ妙才、美人になっちゃってまぁ」
まぁ、もともと美人か、美人が附子になるってのは聞いたことがない、逆なら聞いたことがあるが
「お前はあの日に、姉者に斬られたはず・・・!」
ああ、そんなこともあったなぁ・・・痛かったなぁ・・・あれは
「まぁ落ち着けって、妙才」
「・・・っ!」
何処からか弓を取り出して、こちらへと向ける・・・ああ??
「何のつもりだよ、妙才」
てかどっから出した、ドラ○もんかお前は
「華琳様に知られる前に・・・この場で!!」
矢を放つ妙才・・・寸分たがわず額に突き刺さり、俺の体は矢の反動により後ろへと倒れる

「え・・・あ・・・やった・・・のか・・・」
　あっけなくやられた俺に、安堵した声を出す妙才
　しかしながら、全くもって惜しい
「だからお前らは俺を殺しきれんのだ」
「やったか!」はフラグだ、大抵やってない
「なん・・・だと・・・」
　矢を額に刺したまま起き上がり、見せつける様に引き抜く
　ズプリと音を立て血が顔を流れる
「一回死亡だ」
「・・・え・・・あ・・・・・!」
　引き抜くと同時に傷は癒える、血は皮膚より吸収され乾いた跡すらない
「さて、あと何回殺してくれるんだ?妙さ」
「何度でもだ!」
　後ろから斬られる、この声も懐かしい、ってかめっちゃ痛い
　後ろを振り向き真正面から顔を見る、月明かりで照らされているその顔は
「おお・・・元譲か!久しいな!!」
　相変わらずのデコっぱちだ、それにしてもデコ広くなってねぇか?

「生きていたか！子孝!!」
　親の敵を見る目で睨みつけてくる
　ってか台詞だけ聞けば喜びの言葉じゃないのか？これ
「おおとも、あの程度じゃ俺を殺しきれんよ！」
　懐かしいな、後はここにあの優れた姉がいれば
「・・・ああ、本当にあの時の焼き回しだ」
　燃える俺に苦しそうな元譲、理解したくないと言わんばかりの妙才の顔に、相変わらず俺に対して無表情な姉・・・
　そういや、いつも一緒だと思ったが・・・今日は違うみてぇだな
「？何を言っているかは知らんがお前は死ね!!」
　今度は真正面から袈裟に斬られる
「おお・・・さらに鋭くなったな、元譲」
　だが瞬時に治る、それが俺の才能、生まれ持って備わった能力、化物たる条件
「相変わらずなのね、あなたは・・・」
　また後ろから懐かしい声、本当に懐かしい
　懐かしすぎて反吐が出てきそうだ
「「華琳様!!」」

「まったく、息抜きにと出てみれば・・・鬼に会ったようね？二人とも」
　正解だ、俺は血を吸う鬼だ
「お下がりください！この者は私が斬り捨てますので・・・秋蘭!!」
「ああ、わかった姉者・・・華琳様、こちらへ」
　おいおい、本当にあの時と同じか、しかも全員ともあの時と同じ顔だ
「全く・・・なにもかもが・・・皆懐かしい」
　宇宙的な戦艦の艦長も同じことを言ってたな、これ
「ええ・・・まったくね」
　おう、乗ってくるのかよ、姉上、そりゃいいや、楽しくなりそうだ
　演劇は好きな方だぜ？
「華琳様!!」
「手出し無用よ」
「しかし!!」
「二度は言わないわよ、秋蘭」
「・・・華琳様」
　おお、珍しい、妙才がへこんでやがる
「そういやあの時もこうして殺された」

「ええ、私が春蘭に命じて斬らせたわ、そのあと火を着けた上で川に投げ捨てたはずだけど？」
本当にな、普通あそこまでやらないぜ？普通はな
俺が化物なら、あんたも立派な化物だよ
「ああ、その度に死んで、その度に蘇った」
「・・・あなたは・・・蓬莱の妙薬でも得たのかしら？」
「いや、他の命を使い潰しているだけさ、永遠には興味はない」
「・・・妙薬の正体を知っているのね？」
前世の某シューティングゲームの知識なら
ってか蓬莱ってこの時代から知られてるのな
「・・・知っているっちゃ知っている」
間違えてはいない、ってか答える気はない、聞く気もないだろうしな
「そう・・・まぁ、いいわ」
「はなっから興味ないなら聞くなよ、悪い癖だ」
「興味を持たせないように話さないで、悪い癖よ」
「・・・・・・・・くくっ」
「クカカカカカカカカカカカ!!!!」

「アハハハハハハハハハ!!!!」
互いに笑う、懐かしいやり取り、もうやらないと思っていた
昔はからこんなやりとりばかりだ、なんだろうか、酒のせいか感慨深くなってる
「・・・ふぅ」
「・・・はぁ」
笑い疲れた、互いに、後は
「何か語ることはあるか?」
おうちに帰るだけだ、夜ふかしはいかんよね、いい子として
「ええ、いくつか」
あるんだ、いや、ノリで聞いた俺も悪いんだけどさ、家帰りたいんだよね
「今のうちに話すか?」
「是非とも・・・この国をどう見る?」
おう、すげぇな、それを俺に聞くか
「素晴らしい、素晴らしく闘争に満ちている、俺のようなろくでなしはくいっぱぐれ無い、よい国だ」
乱世の直前、賊が往来を闊歩し、金持ちが民衆に鞭を打つ、民衆はそのうち賊となる
賊が出れば困るのは金持ちどもだ、そいつら殺すのに俺らのような腕っ節が強い奴が

大威張りできる、ろくに飯食ってねぇの殺すだけだ、やったね！合法暴力だよ!!
「・・・そう」
「他は？」
・・・おおう、苦虫噛み潰した顔ってやつだ、こわっ
だがこの返答は大当たりだと思っている、じゃなきゃこの人もこんなにも早く出世しない
「・・・この町はどう思う？」
「素晴らしい、素晴らしく治安が良い、俺のようなろくでなしでも夜に酒が飲める、よい町だ、できれば住みたいぐらいだ」
「そう」
今度はまんざらでもない感じだ、自分で作り上げたからか？
自尊心が高いのも相変わらずだ
「では最後・・・私の元に来る気は？」
ああ・・・相変わらずだなぁ、んじゃ、俺も返すとしよう
「答えは6年前に答えた、今ならばわかるだろう？・・・俺を殺せるのならば着いていこう、お前の築き上げた道の果てに俺の首を供えることができるのならば、鉄風雷火の限りを尽し、お前の道に立ちふさがる有象無象を殺し尽してやる」

「・・・あなたは」
「だが誰もできないのだ!俺を殺しきれる人間はいないのだ!!クハハハハハハハ!!!」
「っ!・・・そう」
そう、殺しきれる人間は個人として存在しないであろう
最低でも5万の人間が俺の中で蠢いてるんだ、無双シリーズだって１０００人斬りするのがようやくなんだ
そんな簡単には死なない
「喉から手が出る程欲しくなるだろう?なにせ不死の兵士だ」
「・・・そうね」
「そうだ、もう一度やってみるか?都合よくあの時と同じ状況だ、場所は違うがな」
「・・・」
「結果は見えているが・・・やってみるかよ?」
ここでやるのも悪くない、興が乗ったと言うやつ・・・あ、ダメだ、ここでやったらこの街にいられねぇじゃん
「貴様!!」
「止めなさい!!」
元譲が動く・・・が姉上が止める、んーなんだかなー・・・酔いが覚めちまいそうだ

酔ってるうちに言いたいことは吐き出すか、それが一番いい気がする、うん
「俺は曹家の出来損ないだ、人の上に立つ才能は持っていない」
「だけどあなたは人としては上等よ、差別もなく、区別もなく、あらゆる事象に関して客観的な意見を述べれる」
「そこだ、問題はそこなんだよ」
「・・・子孝?」
『人』だからいかんのだ、俺は『人』であってはいかんのだ
俺の憧れは『化物』だ、そうでなくてはつまらない
「俺はな、姉上、あなたの弟なんだ、どうしようもなくとも、どんなろくでなしだとしても、それだけは変わらん、だからこそ傍に立つことも許されねぇ」
「・・・子孝・・・あなた」
「姉貴は王となるべく人間だ、性格も、その言動も・・・俺は違う、俺は化物だ、殺すことに意味を求めず、ただ恐怖を撒き散らす存在だ」
だかろこそ共に歩むことはない
こればっかりは譲れない、そうすることを望んで生まれたんだ
憧れは言っていた『化物は殺すのは、いつだって人間だ』と
「そんなことは・・・!」

「あるさ・・・化物かそうじゃないかの差は簡単にわかる」
「・・・」
「俺は化物と呼ばれ苦悩しない、否定もしない、ただ『的は得ている』としか思わない」
的確すぎる表現だ、『化物』であるからこそ俺という存在がなされる
人という器では到底収まりきらない『力』、俺にはそれがある
「これが普通の人間ならな?悩むんだよ、『なんで俺は化物なんだ』ってな」
そう、これは強い人間の考えだ
己を評価し、『常識』という価値観を持つ、心が強い人間がもつ考えだ
だが、俺はどうしようもなく弱い、だからこそ『化物』がいいんだ
たとえそれが孤独であろうと、失うことはない
俺は――――
「・・・立華!」
「立華、そう、俺はその真名通りだ」
『立華』
婆さんが生花やってたから意味を知っている
姉貴も知ってるはずだ、この仇名の意味を
聡明なお袋が俺の存在を見抜いてこの名を授けた、その意味を

「っ!それは・・・ごめんなさい」
ほらな、知っている、だからこそ手元に置いておきたいんだろ
華を立てる為がこの命、だが、俺は俺だ
「ま、しばらくはここに居るさ、いい町だからな」
「・・・そう、わかったわ、だけどね子孝、私は」
「欲しいものはどうやってでも手に入れる・・・か?」
人はそれをジャイアニズムと言う、なんて横暴な
「・・・そうよ」
「言っておくが、俺を免罪のために使わんでくれよな」
「・・・」
「クカカ、都合が悪くなるとだんまりになるのは変わらねーな・・・ま、いいや、んじゃーな、姉貴、元譲に妙才も元気でな」
「ええ、また会いましょう・・・子孝」
「ふん!今度こそ殺してやるからな!!」
「・・・」
妙才は頭だけ下げた、まぁ、あいつらしい
仮宿へと足を運ぶ、今日の日銭は使い切った、明日は何をしようか・・・

徐々に増えそうな設定のようなもの

性：曹　名：仁　字：子孝　真名：立華
身長１７２ｃｍ　体重７０ｋｇ
特徴：くすんだ金髪、整った顔つき、くせっ毛のあるロングヘアー　つまりは元ネタソックリの金髪版
某吸血鬼のような能力を望み『血を代価とする力』を持っている
つまりは取り込んだ血の分だけ生きながらえることができる
また、その血の分だけ身体能力が上がる
過去に大量虐殺を行い、そのせいで家を追われた
戦闘における技術などは、名だたる武人に一歩及ばない、いわゆる二流
この世界の華琳とは兄弟として転生したが、元凡人が付き合いきれるはずもなく自然と疎遠となる、立華からみた華琳は血縁関係にある他人程度にしか思っていない
本人曰く「あんなにできる人が俺の姉なわけがない」

能力を解説すると、代価を支払うことにより命を永らえる、もしくは致死を無効化し

ている、といったことになる
代価を支払う行為は、なにもその分の領域に留まらず物質の生成等も行える

性：曹　名：操　字：孟徳　真名：華琳
みんな大好き、できるドリル
本作の主人公の姉、様々なことで弟に勝っている為どうして自分のもとに来ないのか不思議がっている
男として生まれた弟に対して様々な教育を施したが、そのせいで避けられ始めたことに気がついていない上、「家人でも罪人は罪人」と結構な殺し方をしたため更に避けられることとなる、本人は避けられてることに気がついていない…気がつきたくないだけかもしれない
華琳から見た立華は賢者や仙人のようなもの、能力を含め、世に対しての考えがまるで「歴史書を見て言っている」ような所を面白く感じている
本人曰く「私の弟がそこらの人間と同じなわけがない」
元々、弟ということから密かに期待を寄せていたが、能力を知ってからその期待が一気に表へと出てきたために、利用する気だと勘違いされているが、気付いてない、結構

なブラコンである

性：夏侯　名：惇　字：元譲　真名：春蘭
みんな大好き、おでこなアホの子
どんな時でも主人に仕える犬のような人物、戦術眼や統率能力はピカイチ
春蘭からみた立華は可哀想な者である、幼い頃より華琳と比べられてきたのを知っており、陰口を叩くものを物理的に両断してきたのは彼女である
彼女としては「死ななくなった」より「死ねなくなった」と感じており、いずれ楽にしてやると、心の奥深くに勝手に誓っていたりする
「諦めん、諦めんぞォォォ!!」
立華に武術を教えたのは彼女であり、その為彼に対する気持ちも強い

性：夏侯　名：淵　字：妙才　真名：秋蘭
みんな大好き、魏のクールビューティー筆頭
暴走する姉のブレーキ役、彼女がいないと政務がマッハになるとは立華の談

秋蘭からみた立華はズバリ化物である、立華の幼い頃を知る彼女は能力を得た立華が元来のものより何一つ変わっていないことに畏敬と畏怖の念を抱いている

味方ならばいいが敵になったら、そんな気持ちが離れず、彼に対して粛々とした態度と攻撃的な態度をとるよう心掛けている器用な子である

過去に立華より告白を受けている、答えはまだ返していない

「む、これは…あの時の恋文か…あの頃は良かったなぁ…」

最近ではたまに遠い目をして昔を思い出す姿が、疲れているのだと誤認されている

戦闘だ!!

性を曹　名は仁　字は子孝　真名は立華
某吸血鬼と同じ『命を代価とする力』を持っている
つまりは取り込んだ命の分だけ生きながらえることができる
これが俺の全て、取り込んだ命を使い潰しているとんでもないろくでなしだ
「あ～、この一杯のために生きてるもんだよなぁ」
絶賛飲酒中でもある
「旦那も好きですねぇ、酒屋で飲めばいいのにこんな場末の屋台なんざ来て」
「こういうのは風情ってのを楽しまなきゃいけねぇんだ」
「このおんぼろ屋台に風情がありますかねぇ・・・」
「大将と屋台があるから風情があるんだ、違いねぇ」
「はは、そいつはなんとも・・・」
苦笑いする大将、飲み続ける俺、今日は新月で星しか見えない夜空
風情があると思うんだがねぇ
「そういや旦那は腕は立つ方ですかい？」

「んー・・・まぁ、立つっちゃ立つけどなぁ・・・どうしてだい？」
唐突だな、なんだ、戦争でも起きるのか？
兵隊にならんのは知ってると思ったんだが
「いやぁ、仕入先の商人が護衛を探してましてねぇ」
「おいおい、探すまでのものじゃ無ぇだろ、こんだけでかい町なんだ」
陳留だったっけ？この町の名前
こんだけでっかいなら、護衛専門の連中ぐらいいるだろ
「いやはや・・・そう思うじゃありませんか」
「そうとしか思えないんだが」
「腕の立つ奴ってのは大抵兵隊になっちまうんですよ」
「ああ・・・まぁそりゃそうだよな」
兵隊にいたほうが安定して金を稼げるし、何より護衛なんかよりずっと安全だ
「で、残った連中は兵隊にもなれねぇようなやつらでして」
「あー…そりゃ、問題だな」
「ってなことで旦那に頼みたいんですがねぇ」
ふむ、それはともかく
「一体、どれくらいもらえるんだ？」

世の中金だよ、姉貴!!
偉い人たちにはそれが…わかってるか、うん
「これいっぱいの銀は確実ですがね」
そういって俺の持ってた財布を指差す大将
「よし、乗った」
迷わず乗る俺、金ってのは大切だが、何より人付き合いも含まれている
何より大将の面子ってものもある、受けねばなるまい、うん
「そういや旦那」
「ん?」
「仕事の斡旋所から弾かれたって本当ですかい?なんでも兵隊以外の仕事を紹介してくれてなかったとか…」
「…言うな」
人付き合いって本当に大事

「～♪～♪～」
　鼻歌を歌いながらガタゴトと揺れる馬車に身を預ける
　同乗者はちっこい子供、ヨーヨーを拡大したようなのを持っている
「あの…」
　護衛の帰りに拾ったみたいだ、あの商人夫妻は結構なお人よしみたいだ、もっと金くれねーかな
「あ…あの！」
「ういうい、何かね嬢ちゃん」
　しかし、うるさいなこのガキ
「その…歌ってる歌ってなんですか？」
「ん？気に入ったのかい？」
「え、あ、はい、楽士さんが歌うような歌じゃないので」
「楽士のやつらの歌とは違うさな、コイツは貧乏な俺が適当に作った歌だよ」
　ってか、この嬢ちゃんいいとこの子か？楽士の歌なんざ早々聞けるもんじゃねーぞ
「えっと」
「つまりは、今作った即興ってこった」

「そ、そうなんですか」
「そういうこと」
「…」
「…」
　このやりとりは三回目、内容は違うが必ずだんまり、ぜってーまたやるで
「あ、あの」
　ほら来た、飽きないね、この子も
「護衛の方なんですよね」
「そだよ」
「それならその、武器は…」
　今の俺の格好はボロ着の上に皮のマントを羽織った状態、剣は質が悪いのは使いたくないから買わない、高いんだよアレ
　一本買うだけでひと月は飲んで暮らせる、馬鹿じゃね？作ったやつ
「なくても大丈夫だぁよ」
「…え？」
「だか「止まれ!!!」お、来た来た」
　止まる馬車…ひふみよひふみよ…ざっと２０人程度か

止まった馬車から出るといかにもって奴が１０人程、後は前の方にいるみたいでほかに雇っている連中の相手をしている
「ああ?･なんだテメエ、お前も護衛か?･」
「まぁ、そだな」
「へっ･嘘つけよ、短刀のひとつもぶらさげてぎゃぶ!!･」
面倒なので貫手で頭を貫く、ついでに左手側のやつの腹を掴み持ち上げる
「な、や、やめろ!!･降ろせぇぇぇぇぇぇぇ!!?･」
肉だけ引きちぎって投げ捨てる、内蔵が飛び出ているが頭が状況に追い付いていないようだ、叫びながら虫のようにもがいている
そいつの頭を踏みつぶし、残りに向き直る
「ひ…あ…ば、化物…」
「正解だ、虫けら、褒美に一息に潰してやるよ」
無敵モードだ、派手にやらせてもらうとしよう

少女とも呼べるべき彼女が見たのは、正しく地獄であった
大の男が纏めて数人串刺しにされ、持ち上げられてはバラバラにする
逃げる者には黒い犬がどこからか飛び出し、足に噛み付いては処刑人の元へ連れて行く
処刑人は耳に響くような高笑いをしながらゆっくりと頭を踏み潰す
狩人が獲物になる、そういった光景は少女とて何度か見てきた
だからこそ言える、これは違う、と
彼らは狩人ですら、獲物ですらない
処刑人の首に槍が刺さる、刺さったまま処刑人は斬首刑を執行する
処刑人の胸に剣が生える、生やしたまま処刑人は胴を寸断する
高笑いが続いてる、楽しくて楽しくて堪らないよ、と言うかのような高笑いが
彼女は気づいた、この光景を知っていることに
処刑人の笑顔をどこかで見たことに

彼女の村の子供が、蟻の巣を潰していた時の笑みだ

彼女は動けなかった、動いてはいけないと思った
動けば、虫と判断されるかもしれない
ならば私は、石木になろう、瞬きもせず、身じろぎもせず
何もしない、石木となっていよう
彼女の頬に獲物の臓物がぴしゃりと叩きつけられる
それでも彼女は何もしなかった
自らがそれになるのを、少しでも動くことを、本能が拒んだのである

ガタゴトと揺れること無く止まった馬車、カーカー無くカラス、唖然とする商人、青ざめているその婦人と乗り合わせた子供と生き残りの護衛、そして…
「かー!まずいわこいつら、いいもん食って無ぇなぁ」
命を取り込んでいる俺である
具体的には足から血を啜っている
「あ、あんた…一体」
「んー?化物だよ、化物…あぁ、安心しなって、敵にしか使わんよ」
「そ、そうかい…」
未だに唖然としている商人、いやぁ、肝が太いわこいつ、流石大将の紹介だ
前見た奴は小便垂れ流しながら命乞いしてたもの、まぁ、当然だわな
「ぐ…ぅ!」
「あらら?」
賊のくせにしぶといことで、土手っ腹に穴が空いているのにまだ生きようとしてる
「お前は…」
作りこそ荒いが、頑健そうで分厚い峰をした青龍刀を杖替わりにし立ち上がる
大した根性だ、腕もそれなりにあるんだろうな
なんで賊やってんだ、仕官すればいいのに、そーすりゃ死ななくて済むのに

「お前は…お前は何だ!?」
　それを俺に聞くか、面白いな
「俺か?見てわからんか?化物だ」
　見たまんまだ、分かるでしょ
「血を吸う化物・・・僵屍（キョンシー）か!?」
「惜しいな、血を吸うわけじゃない、命を取り込んでいるんだ、それに俺は死んでいない」
　本当に…こんなに教養があるなら仕官しろよ、貧乏な農民上がりじゃ知らんぞ、僵屍なんて言葉
「命を…取り込む…まさか」
「まぁ、どうでもいいだろ、そんなことは」
「聞いたことあるぞ…大秦（ローマ）からの商人が言っていた」
　聞いてねぇやこいつ、もういいや
　右手で頭を全力で叩く
「真祖の…吸血…!!」
　体はドサリと崩れ落ち、俺の右手にはびっくりしたままの男の顔が収まってる
「はぁ…士官すりゃよかったのによ」
　首から上だけの顔に話す、本当にわからん世の中だ、コイツより馬鹿なのが官職につ

いてるのによ

　頭を放り投げ
「死体にゃ勿体ねぇ」
　と青龍刀を拾い上げ馬車へと歩く
「さ、行こうぜ、急がねぇと門がくぐれなくなる」
「あ…はい！」
　再起動した商人が馬車へと向かう、切り替えが早いのは助かる、護衛の連中やさっきのガキはまだ固まってやがる
　乗ってた馬車に向かう途中でガキの肩に手を置く
「…ひっ!?」
　おうおう、さすがにビビるよなぁ
「さっきの答えだ」
「え？え？」
　顔に臓物でも引っかかったのか血だらけになった顔に疑問を浮かべている
「虎の武器は爪、狼の武器は牙、人の武器は知恵、化物の武器は？」
「あ…と」

「正解は『全身』だ、殴ろうが蹴ろうが何をしようとも絶対の一撃となる」
唖然とするガキ、純然たる事実だ、大抵殴れば済む
「…な、武器なんていらんだろ」
言い捨てて馬車へ乗り込む
続けて乗ってくるガキ…大した肝だ
「…クカカッ」
「っ!?」
笑い出した俺に警戒するガキ、構わず笑う
強いねぇ、人間、強いふりをしている俺とは違う
そう思うと愉快でたまらず、また笑い出す、今日はうまい酒が飲めそうだ

いろいろと面倒になってきたの

「くぁ～・・・うまいねぇ・・・」
今日も今日とて酒を飲む
上等な酒ではなく安っぽい酒
つまみは炙って塩を振っただけの肉
「この安っぽさがたまらん」
「安っぽくて悪うござんしたね、旦那」
苦笑いする大将、ま、嘘じゃないしな
「いやいや、前にも言ったがこの方が風情がある」
「場末の屋台に何を感じてるかは知りはしませんがね」
大将の言葉を流しながら肉をほおばる、油が落ち切っている
塩の味も薄い、いわゆる安物
「ま、似合いだな」
「なにがですかい？」
「いいや、なんでも」

「そうですかい」
そういって大将は肉を焼く
俺は酒を飲む
今日は満月、星が見えない嫌な夜だ
「そういや旦那、黄巾って知ってますかい？」
「ああ？抗菌？」
フッ素加工のことか？ずいぶんとぶっ飛んでるなぁ、おい
いくら時代フッ飛ばしてるようなもんがゴロゴロあるったってそりゃ吹き飛びすぎだろう
「ええ、頭に黄色の布巻いて暴れてる連中なんですがね」
抗菌じゃなくて黄巾か、紛らわしい
「黄色いのは好きじゃないな、芭蕉（ばなな）は好きだが」
「・・・南蛮まで行ったんですかい？」
「おう、暇つぶしがてら」
本当に群生してるんですもの、参っちゃうね
乱獲してたら猫っぽい奴らが泣いて止めてくるし
流石に心が痛んだっての、全部食ったけど

「で、黄巾がどうかしたのかい？」
「ええ、なんでも大元叩くらしくって、今どこもかしこも兵隊集めてるようでして」
「ふむふむ」
「旦那にもお呼びがかかってるんですわ」
「はい？」
　なんで大将がそんなこと知ってるんだ？
「いやね、あっしは一町民でしてね」
「あー…ごり押しされた？」
「いやはや…面目ない」
　ま、かまわんのだがね、大将も悪びれた顔してないし
「いくらほど包まれたよ」
「ざっと3回死ねる分くらいですかねぇ」
「ならもっと良い肉出せよ、俺じゃなかったら噛み切れんだろこれ」
　本当にそれほど硬い、何の肉かわからん程に硬い
「旦那だけですよ、そんなの出すの」
「本当いい度胸してるよなぁ、大将よぉ…」
　真っ二つにしてやろうかこの野郎…

「まぁまぁ…とりあえず顔出しだけはしっかりとやってくだせェ、あっしが言われたのはそこまでなんで」
「ういうい、それじゃ、俺は城に行けばいいのかな？」
「へぇ…すみませんね」
「いいってことよ、…次のはしっかりと奢れよ？」
「わかってまさぁ」
なんか馬が合うなぁ、打てば響くとはこのことなのだろうか
前世じゃ恋人だったかな？
「うおぼろろろろろろろろ」
その場でぶちまけたら追い出された、因果応報ってやつだね
でもね、いくら俺の正体知ってるからって牛刀ぶん投げることはないんじゃないかと思うんだ

「はーい、みんな大好き曹仁様だよー」
死なない程度に警備を蹴散らし謁見の間の扉を蹴破る
「な、賊か!?」
「警備の者は何をしている!?」
なんか知らねぇー奴らが増えてる、特にちんまいのがうるせぇ
「来たわね、立華」
姉貴と夏候姉妹のみが落ち着き払っている
「来たな、今度こそその首地の果てまで飛ばしてやる!!」
前言撤回、犬が騒いでる、スッゲェ物騒なこと吠えてる
「真名呼ぶなというに・・・もういいや、メンドくせぇ」
「な、華琳様に向かって・・・!!」
うるさいのが余計にうるさい、誰だこれ
犬が増えたかと思ったら猫がいるよ、なんだこれ、南蛮で見たぞこんなの
「落ち着きなさい、桂花」

「しかし!!」
　気にせず姉貴の前まで進む
「と、止まれ!!」
「慌てるな妙才、お前はそんなやつじゃないだろ?」
　慌てるクールビューティー、眼福ですわぁー、弓矢向けられてなきゃもっと幸せですわー
　カツカツと足音立てながら進む
「止まらんかぁ!!」
　斬りつけてきた元譲をそのままに進む
　傍から見た異様だろう
　なにせ体に剣が埋まったまま、埋めた人間を引き吊りながら歩いているのだから
　姉上の直前に立つと頭に衝撃がくる、左右からだ、とてつもなく痛い
　右を見ると鉄球抱えた少女、左を見ると・・・
「いつぞやの小娘か」
　完全に怯えた顔だ、当たり前だがな
　正面に向き直ると不敵な顔した姉上
「あら、よくここまで来たわね立華、何の用?」

それをあんたが言うかね
「…いくらだ？」
見下ろしながら言う
「なんのこと？」
大将に払った金のことだと思っているんだろうがそうじゃない
「いくらで化物を使うのかと聞いているんだ」
「…そう、そういうこと」
悲しげに目を伏せる姉上、騙されるかってんだ
「そうもなにも、それ以外考えがつかんのだが？」
「私の下には」
「それは前にも言った」
「それでも…あなたは」
「くどいぞ、裸の王」
周りがざわめき立つ…なんかオーラまとってる子がいるんだけど、何アレ、波動拳でも打つの？
いきなり瞬獄殺決められたらいくら俺でもどうなるかわからんのだが…まぁいい
「貴様が俺を殺せん限りお前に仕えることはない、これまでもこれからもそうだったは

ずなのだ」
「…」
「故に俺を使うというのならば其相応の対価を用意することだ、異論はあるまい」
タダ働きはごめんだし、ここで断ると大将にも迷惑がかかりそうだしね
「…ええ、分かったわ」
「ならばよし」
そう言い踵を返す、こんな居づらい空間にいつまでも居れるか！
「…いつまでぶら下がっているつもりだ、元譲」
「好きでやってると思ってるのか!?」
若干半泣きだな、だったらよせばいいのに
剣ごと投げる、埋まっていた剣を引き抜かずにやったためあちこちに内蔵が飛ぶ
元譲は飛んだ内蔵踏んづけてこけてやがる、ざまぁ
「ひっ！」
「なんと・・・！」
「・・・狂人の類なのか?」
様々な感想をありがとう、大体あってるよ、とそう思いつつ歩く
飛び散った内蔵はそのままにすぐに体は再生してゆく

それは見てまた驚く、見飽きた光景だ
ちなみに元譲は、何かブツブツ言いながら床をたたいている
ちょっと怖い
「少しよろしいですか～？」
またちんまいのが出てきた、頭に人形載せている
「なんだ？」
人形に興味が有り話を聞くことに、…あれ、あの人形、万博のやつじゃね？
「あなたが噂の化物ですか？」
「ああ」
やっぱ万博のだ、俺見に行ったもの、なに、昔からあるデザインなのあれ
芸術爆発してたのは中国も同じなのか、やべぇ、侮れねぇな、てっきりパクってるばっかりかと
「…どうして、いや、どうやって化物になれたのですか？風はそれが知りたいのです」
「ふむ」
え、なに、化物のなり方？やべ、話聞いてなかった
「弱者たれ」
化物は弱い奴しかならねぇーって旦那が言ってたからな

実際のところ俺はただの弱虫だ
「弱者…ですか？」
「そうだ、化物とは人間でいることに耐え切れなくなった弱者の末路だ」
少なくとも、瀕死の時に血を舐めればいいんじゃないかと思う
「ですがあなたは強いですよ？だからこその化物だと思うのですがー？」
「努力も重ねず楽して強くなったものがか？」
転生特典といったものにすがった、努力を拒んだ弱者
何ら過程も踏まずに、逃げることを選んだ
…今言ってもどうしようもないことだけどな
「ふーむ」
「要はそういうことだ」
話を切り、脇をすり抜けざまに人形を取る
「ああ～風の宝譿が～」
「よく出来てんなぁ～これ」
マジでよく出来てる、なんでこんなに上手く出来てるんだ？やっぱり起源は中国なのか？
人の物を取りっぱなしなのはあまりよろしくないので、すぐに頭に載せる

「むぅ～…いいように弄ばれたのです、こうなってはお兄さんに責任を」
そこまで言ってメガネの嬢ちゃんがブッ倒れた
「風が…未熟なカラダを…たくましい…ぶふっ!!」
「し、しっかりするの～!」
なんだありゃ、芸人かなんかか?
「・・・あ～もう帰るぜ」
そう言って扉の方へと歩く、見送りはいらねーからこっち見んな
「あ、待つのですお兄さん、責任は取ってもらいますよ?」
「せめて元譲ぐらいになってから来い」
そう言ってその場をあとにする
後ろの方で「…大きのがお好みですか」とか聞こえたがその通りだ
小さいのにはトラウマがあるんでね

貧民区のあばら家に帰る、そこらに寝っ転がり穴のあいた天井から差す月の光を見る
「…いくらくれんだろ」

金額聞いてねぇや

泡沫の夢

私は知っている、私の弟の苦悩を
私は知らない、私の弟の性格を
私の弟は人と共に生きたいのだ、一人は嫌なはずなのだ
私の弟は人を殺したいのだ、一人が嫌なはずなのに
私の弟は努力家だ、私と言う存在を姉に持ち、それでも縋り追いつこうとした
私の弟は弱者だ、傷つくことを恐れ、私や家族から常に距離を置いていた
弟はいつも頑張っていた、勉学も、武術も、私の隣に立てるようにと
私はいつも叱咤していた、勉学も、武術も、私の隣に立てるようになれと
最愛の従兄弟達も手伝ってくれていた、時に優しく、時に厳しく
弟もそれに応えようとした、身を削りながら、顔に涙を伝わせながら
甘美な時間だった、幸せな時間だった、姉としては失格だったかもしれない
けど、あの子も私も、確かに幸せだった

「あなたには、才能がない」

その一言を母があの子に伝えるまでは

私が見たのは血の海だった
部屋いっぱいに赤い液体が溜まっている
鼻につく鉄の匂いと臓腑の匂いは今でも忘れられない
部屋の中央には見知った顔が一人
何かをするわけでもなく、ただ佇んでいる
彼がこちらへ振り返る
初めて見る表情を貼り付けて
悲しい時、悔しい時、怒った時、嬉しい時

様々な表情を私は見てきた、なのに
「春蘭…？どうしたんだい？」
私は初めてあの子の縋る表情を見た
どうにかしなくては、私はあの子の師匠なんだから

「立華を殺しに行くわ」
耳を疑った、だが、覚悟した表情を持って告げられたその言葉は間違えではなかった
確かに告げられたのだ、あの子を殺しに行くと
主の隣には私の姉が、同じく覚悟を決めている
「何があったのですか」
聞かずにはいられなかった、同時に聞きたくもなかった
「屋敷にいた人間は私たちを除いてあの子に殺されたわ」

「だから…あの子を討たなけれないけない」
あの子が、殺したのか？
努力家で、強がりで、わがままで、優しいあの子が？
グルグルと思考が回り続ける

気づけば弓を持っていた
隣には主と姉が、正面にはあの子がいた
いや、あれは本当にあの子なのか？
あの子はあんな風に笑わない、もっと優しく微笑む
あれは、獣の笑みだ
あれは、あの子じゃない
あれはなんだ、なんだなんだなんだなんだなんだなんだなんだ!!??
気づけば私は弓を射っていた

「あなたには、才能がない」
母親にそう言われた、知っていた、それでも努力した
いつか、姉の隣に立てるように
輪廻転生の輪をくぐり、常人では手にしない力を持って生まれた
前世とも呼べるべき記憶を持ち、常人よりも裕福な家に生まれた
それでもなお足りない、才覚を持つ者には
足りぬ分は補え、努力で、能力で
しかし、そのちっぽけな努力は報われず
俺の能力は発揮できぬままだ
「あなたは、あの子の傍には立たせられない」
うるさい、それを決めるのは俺だ
俺の人生だ、俺のやりたいようにやる
沸き立つような怒りが生まれた
目の前の女に叩きつけてやれと

今まで溜め込んだ、お前たちが無為にしてる命の力を
声に従い、全力を持って叩きつけた

一瞬だけ皆で食卓を囲んだことを思い出した
母と俺と姉と従兄弟達と家人とで
みんな楽しそうに笑っていた

目が覚める、朝のようだ
分水嶺はもはや超えた、戻ることのない、しかし戻りたいと願う夢
夢は泡沫のように記憶から溶けてなくなる
それでも、その夢を作り出したのは己の記憶だ
故に
「立華…待っていなさい、必ず隣に立たせてあげるから…」
それを戒めとするもの
「…そうだ、私は…師匠なんだ…！」
再確認するもの
「…どうして、変わってしまったのだ…」
嘆くもの
「んぁ～…嫌な夢見たな…殺される夢とか…勘弁して欲しいわ」
「勘弁して欲しいのこっちの台詞ですぜ、旦那…とっとと自分の床に帰ってくださいよ」
夢としか捉えないもの
様々な価値観の元、『夢』というものも価値を変えていく
それでも、夢はそこにあり続ける

夢という存在は常に待っている
己の存在が、現実に現れることを

血、怒声、戦場にて

俺はこれを知っている
熱気と殺意と欲が混じったこの空気を
俺はこれを知っている
何ら意味のない言葉に動かされ、意味も見出さずただひたすらに動く人の群れを
俺はこれを知っている
与えられた意志を、自らの意思と勘違いして死んでいく阿呆達を
俺はこれを知っている

これこそが俺の望んだ世界なのだと

「あぁ…絶景というのはこのことを言うのだろう」
俺の目の前で、戦争が行われている
頭に黄色の布を巻いた奴らが、それなりに立派とも言える鎧を着た連中と殺し合っている
ある者は怒号を、ある者は悲鳴を、ある者は降伏を、腹の底から叫んでいる
血が、肉が、頭が、臓物が、人が吹き飛んでいる
…人？
「おぉ…？なんだ、いるじゃないか、俺以外に化物が」
赤毛だ、血の色より淡い赤毛の女が血風を巻き上げている
そこには一切の慈悲が見られない、躊躇いもない
ただ当たり前のように死が巻き上がっている
「クッ…クハハハハハハ!!!なんだよ、俺だけじゃないのかい！」
圧倒的に格が違う
同じ人間を扱うにしてはあまりにも粗雑だ、あまりにも粗暴だ
まるで、雑草を刈るかのように、命を刈っている
「はぁぁぁ…世界は広いねぇ」
顔がにやける、知りえもしなかった光景だ

これだけでもここに来た価値が見い出せる
「さて…俺もうごぉ!!」
衝撃が俺の頭を突き抜ける、文字通りに、物理的に
「いってぇ…って、矢か?これ」
額から飛び出てる矢をそのまま前に抜き後ろを振り向く
そこに見えるのは此方に弓を向ける妙才と傍らに不敵な笑みを浮かべる姉貴
どうやら頭を射抜かれたようだ、『頭にキている』って意味かい?これは
「へいへい…とっとと働きますよ、ったく…」
ご立腹なのかはわからんがね、普通射抜くか?
まぁいい、どうせ死ぬことはない
そんなことにに腹立てるよりも…
「俺もまぜてくれねーかなぁ?」
愉しい愉しい虐殺に赴く方が先だ

「よろしかったのですか？」
主人がやれといったのだが、不安は拭えない
アレがこちらに敵意を持ったが最後、防ぐ手立てはない
「ああでもしないとあの子は動かないでしょう？」
不敵に笑う我が主
「しかし…」
「あなたは恐れすぎよ、秋蘭、アレはそこまで器の小さい男じゃないわ」
「はぁ…」
頭を射抜くことに器も何もないんじゃなかろうか
「それに、早く私は見たいのよ、あの子の初陣を」
そこにあるのは笑みだ、閨で私たちに向けてくださる、慈愛に満ちた笑み
「華琳様…」
私はいつかあなた様がアレと同じになるようで怖いです
出てきた言葉は言えず、そのまま頭の中で消えていった

「はぁぁぁ!!」
目の前に出てきた男を殴り飛ばし、そのまま気弾で吹き飛ばす
黄巾――自分達の村だけでなく、今やこの大陸に蔓延る害悪
「でぇぇぇりゃぁぁぁ!!!」
飛び出てきた槍を躱し、反動で相手の頭を蹴り飛ばす
そのままに蹴り抜いた足を地に戻しまた回転、足に溜めた気を敵兵集団へ飛ばす
「うわぁぁぁぁ!!!」
「な、何だありゃ…化物か!?」
馬鹿な、ただ気を練り外へと出しているだけだ
何ら努力もせず、ただ奪うだけのお前らには出来ないだけだ
「ん～違うぜ」
咄嗟に出た侮蔑の感情を思考に反映させた瞬間
ほんの僅かな合間だった、私を化物と言った男以外は
「俺が化物だ」
皆死んでいた、まるで人形師が操る人形の糸が切れたように崩れ落ちていった
否、崩れ落ちるように血溜りの中へと沈んでいった
「え…あ、え?」

男は混乱している、無理もない
目の前にいた者達、隣にいた者達、自らの背後にいた者達
その全てが一斉に血溜りに沈んでいったのだ
「どうだ?人間にはこんな真似できねぇだろ?」
後ろから声が聞こえる、ごく最近聞いた声だ
確か…そう、確か
「そ、曹仁様?」
「あーいよ、何だい?波動拳使い」
我々の主、華琳様の弟君
春蘭様の一撃をものともしなかった、正真正銘の化物
「あ、いえ、その」
「あー…悪かったよ、獲物横取りする気はなかったんだが」
華琳様とは違う、くすんだ金色の髪を無造作に掻きながら自分の前へと踏み出す
「こいつが悪いんだこいつが」
先ほど、自分に対して化物と言ったであろう男を指差す
「こいつはこともあろうにお前さん如きを化物扱いしやがった」
男は見た

ひどく、ひどく歪んだ笑みだった
獣が吠える直前に浮かべるような、頬を歪ませながら浮かべる笑み
「だから、冥土の土産に見せてやろうと思ってな」

――本物をな――

男は咄嗟に逃げ出した、恐怖からか、不利だからかはわからない
なぜならそんなことを思うよりも早く
「逃げるなら手伝ってやる」
真っ二つにされていた、逃げようと体を翻した状態で
「ただし真っ二つだ…ってな」
自分は見てしまった、指を弾いたのを
自分は理解してしまった、その動作だけで真っ二つにしたことを
自分とは違う、技術でもなんでもない、ただの力だけでそれをやってのけたのだ
呆然とするしかなかった、戦場だというのに、先程まで戦っていたというのに
ここだけはやけに静かに感じた、周りでは怒声が飛び交っているのに
「さて、あの赤毛はどこにいったかね…」

一言呟き立ち去る彼をただ見送っていた
ぼんやりと、ただ見ていた
「自分も…」
今まで無かった、新たな気持ちが心に宿るのを感じながら
「自分も…ああなりたい」
尊敬はせども、軽蔑はせども
ただの一度も憧れはなかった
自分は自分、そう思い鍛錬を積み重ねた
強くなれば、強くなった分だけ守れるものが増えると
「あれが…自分の…!」
だけど、違う、違った
私が得れた強さでは、守れないこともあった
あの強さなら、化物ならば…!!
「到達点…!」
もうだれもしなせなくてすむんだ
「凪っ!!」
…?こえ?声…ああ、真珠の声だ…

「しっかりせえ！ボケっとしとる暇なんてないで!?」
「え、ああ…そうだな」
　そうだった…ここは戦場で、私は隊長だ
「ほんまに大丈夫かいな…？こっちはええから一旦中央に行くで！」
「だが…」
　こちら側の方が押されていた、そうだ、だから増援として…
「華琳様の命令や、『弟が向かうから右翼へ行け』やと」
　そうか、アレが行くのか…そうか…
「…わかった、すぐに行く」
　まだ、今はまだ、傍に立つことすらもできない
　だから今は我慢しよう
　いつか、必ず…

「それにしても…凪のやつどないしたんやろ…？」
　彼女の戦い方は理解している
　殴り蹴る、時には気弾で吹き飛ばす

加減ナシのそれはそこらの人間なんて耐えれずに吹き飛ぶ
だが、それにしてもだ
「なにも…ここまでバラバラせぇへんでもええのに…」
よほどイラついていたのだろうか？
まぁ、そうなのだろう、親友を怒らせたからこうなったのだ
「うん、まぁいいか、うちもとっとと行かな」
そう呟きその場を後にする
普段の彼女ならば気づけたのだろう
戦場でなければ、日常の中で生まれた死体ならば
自らの親友がこのような器用な殺し方なんてできないことに
その場に残ったのは縦に真っ二つになった死体と
綺麗に三等分された無数の死体だけだった

矜持と傲慢の違い

悲鳴が聞こえる、命を散らす時の悲鳴だ
怒号が聞こえる、命を散らす時の怒号だ
嗚咽が聞こえる、命が散った時の嗚咽だ
殺意が――聞こえる――

命を散らす時の殺意が

「よう、赤いの」
ようやくたどり着いた、結構寄り道をしたが敵の大半はここに来ていたようだ
だが、もうその敵もいない
そりゃそうだ、3万もいたのにビクともしないんだ、この女は
「…誰？」
首を傾げる姿は年頃の少女だ

右手に持ってる方天戟と血だらけの姿をの除けば…だが
「ああ、俺の名前は曹仁…お前と同じ化物さ」
意図的に嗤う、虚仮にするように、お前は人間じゃない、と
「興味ない」
一瞬、視界が反転する
見慣れたような見慣れないような光景
…ああ、胴体を真っ二つにされたのか
っと、おいおい、まだ死んじゃいないんだ
そのままどっか行こうとするなよ
曹仁の体はドロリと溶け、赤黒い水溜りとなり人型の形へと変化する
「おいおい、まだ死んじゃいな」
赤毛の少女の体が翻ったかと思えば今度は首を飛ばされていた
演出するのも面倒だ、今度はそのまま話を続ける
飛ばされた頭が喋りだす
「だぁから、殺すなっての、まぁ死にきれちゃいないんだがね」
そのまま飛ばされた頭を持ち上げ首へと繋げる
「…化物」

ぽつりと、少女が口に出す
不覚にもその言葉に
「ク、クッハハハハハハハハ!!!!!」
笑っちまう、笑わせてくれる
「俺が化物だなんてこたぁ重々承知してるんだがね」
身構える少女、笑いながら話し出す俺

――お前も同じだろ？呂奉先――

瞬間後ろから切られた感覚
ぐるりと向けば白髪に褐色の肌をした男がいる
「無事か？恋」
「…大丈夫」
手には黒い剣と白い剣
…なるほどね、こいつもか
白髪はまた斬りかかってくるが
「甘ぇよ、糞餓鬼」

強引に刃ごと殴り抜く
上手いこと衝撃を緩和したのかそのまま後方へと飛ぶ
「クッ…まさか振るわれる刃に拳を突き立てるとはな」
ん?そんな感じだったかね?かの赤い弓兵は
まぁいい、楽しみがひとつ増えた
「気をつけて、士郎…そいつ、強い」
後ろには呂布（多分）、前には弓兵（モドキ）
「ああ、わかっているさ、だが…お前と俺ならば問題はない」
俺を挟んでの会話、余裕があると見るべきかこいつらの平常がこんななのかともかく、だ
確認ぐらいはしてみるかね
「待て待て、俺は曹操…様の陣営の者だ、事を構える気は無いっての」
げぇ…様付けるとか気持ち悪いな我ながら
「なんだと?」
「そっちの嬢ちゃんには名乗ったぜ?俺は曹仁ってんだ」
名乗った途端に驚くモドキ、人の名前に問題でもあんのかよ
「曹…仁!?馬鹿な…いや、外史の一つだと言っていた…それならば…しかし…」

確定だな、こいつ
俺と同じ転生者か、ってぇすると
「まぁどうでもいいや、忘れてくれ今まで言った言葉は、よ」
「む、どういうことだ?」
こいつを喰えば、こいつの力が手に入るかもしれねーってことだ
もし手に入らなくても、神様印の転生者だ、常人よか強い力を持ってる
つまり
「てめぇらから手ぇ出した、その上ここは戦場だ、ぶっ殺されても文句はねーよな?」
こいつらの血を取り込めば雑多な奴取り込むよか遥かに効率がいい…はずだ
経験上強けりゃ強いほど、賢ければ賢いほど『力』が上昇するのが感じ取れた
「ふむ、待て、先に斬りかかったことは謝罪しよう、しかしだな…」
「しかしも案山子もありゃしねぇよ!!」
一気に踏み込み顔面目掛けて拳を振るう
白髪はそれを余裕を持って横へと避ける
振り抜いた反動で無理やり体を半回転させ、蹴る
バックステップでそれも避ける、距離を取られたが、いい塩梅だ
それに…

「ああ…なるほどな」
ありゃ、何もわかっちゃいねぇ、『英雄』ってのを一欠片も理解してねぇ
「待て、と言っている、互いに無益なことをしても意味はないだろう」
馬鹿にしたような顔で、鼻で笑いながら続ける
「お前の行動は全て見えている、格の違いを知れ」
…ああ、こいつは本当に阿呆なんだな
「さて、俺達はこのまま―」
能力で青龍刀を模した物を作り投げる
その瞬間に奴の背後の地面へと血を送る
奴はため息をつきながら
キィイン、と予想通りに剣を弾く
「無駄だと言って…ッ!?」
弾いた瞬間に血液を槍にして阿呆の体を貫く
「な…これ…は…」
驚愕って顔をする阿呆、俺はただ哂っている
「馬鹿かお前は、弓兵の真似するんなら前線なんか出てくるんじゃねぇよ」
「き…貴様…」

口を開きながら阿呆の元へと歩いていく
「弓兵が英雄へと上り詰めたのは、ただ宝具を生み出せるからではない、それ以上に奴は極めていたからだ
戦闘を、戦略を、戦術を
ただ、自らの身体能力に頼った戦い方してるんじゃ極まってるとは言えねぇ、いいか？糞餓鬼」

唖然としてるのは白髪だけでは無く、後ろにいる呂布（もう確定でいいや）もだ
まさかやられるとは思っていなかったんだろう

「その格好で、その剣で、あの弓兵の真似事するんならよーく心得ておけ

――二流を極めてこそ、エミヤシロウとなれることをな」

「ま…待て…まさか…お前は…！」
告げてからそのまま加減した力で顎を打ち抜く
砕けちゃいるが、死んではいない、気絶したみたいだしな

あまりにも阿呆過ぎて、あまりにもつまらな過ぎて、あまりにも弱々しくて
殺す気にもなれやしない、呆れ返ってしまう程だ
「女、こいつをとっとと連れて消え失せろ」
動きもせずに、ただじっと俺に殺気を飛ばしてきている
「…機嫌が悪いんだ、早くしねぇと…殺すぞ?」
俺の言葉にようやく動き、阿呆の元へと駆けつける
体を貫いていた血は既に無い、少しばかり抜き取って俺の中へと戻ってきている
やはり量が足りないみたいだ、対して力は上がっていない
ちらりと、阿呆のほうを向く
阿呆を担ぎ、どっかへ行くと思ったらこちらを向き
「…恋が、いつか、絶対に殺す…!」
そう呟くように告げ、そのまま駆け出す

捨て台詞吐いて行きやがった…アレがそんなに大事か?
「つたく…真似るんならもっと上手く真似ろよな」
それが出来なきゃ俺みたいにグダグダとやってりゃいいんだ
憧れてたもの汚しやがってよ

はぁ、とため息をついてると
「立華ぁぁぁぁ!!!」
後ろからどっかで聞いた声がした、振り向けば
「貴様ぁぁぁぁ!!!何勝手に一人駆けなんかしとるんだぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
めっちゃ怖い形相の元譲…いや、鬼だなあれは、鬼がいる
「そっちの命令だろうがよぉぉぉぉぉぉ!!!」
鬼ごっこする気はないが、流石に怖いぞあれ、化物になっても怖いものってあるんだな
「そこまでしろとは言っとらんわぁぁぁぁぁぁ!!!」
鬼（元譲）に捕まるよりは女郎蜘蛛（姉）の方がましだ、とっとと逃げよう、うん
「待てぇぇ!!逃げるなぁぁ!!!」
「逃げるわぁぁ!!!剣仕舞ってからもういっぺん出直せぇぇぇ!!!」
…差が縮まらないんだけど、これ逃げ切れるかねぇ？

顔合わせ

「ひでぇ目にあったぜ」
結局逃げきれなかった、ってかなんでほかの奴らまで追いかけてくんだよ
訳が分からん
斬られはしなかったが、泣きそうになるまで殴られた
「お前が逃げるからだ！」
「剣振りかぶってくりゃ犬猫でも逃げるわ!!」
元譲のせいで戻るのが遅れちまった
あの姉のことだ、メンドクセーこと言うに違いない
そんなことを考えつつ自軍の陣地へと向かう
なんか途中でも説明されたが、すでに戦は終わってるようだ
更に、主格の張角達も討ち取ったらしい
まぁ、歴史通りって言えば歴史通りなのかね
俺の三国志の知識は無双するゲームと横山さんしか知らないんだが
陣地に建てられたひとつの幕へと向かう

首脳陣たちが集まってる場所だ
「おーす、げんきー？」
極めて軽いノリで入る
最初の流れをつかむことが重要なんだって博徒の仲が言っていた
「え、えっと…」
おや、知らない顔が４つもいる
ピンクの髪と、黒髪が三つ、金髪がひとつだ
黒髪は男が二人、女が一人
しっかし、まぁキラキラしてる服だねぇ、色々ぶっ飛んでる世界だから突っ込まないけどさ
「あら、帰ったのね、立華」
「おーう、殺されそうになったけど帰ってきましたよ」
犬にはしっかり首輪をつけておけっての、放し飼いってのはマナーがなってねー証拠だ
「その割には元気そうじゃない？」
「ソウデスネー、で、こちらはどちらさん？」
くいっと親指で示す

「なっ！このお方をどなただと…！」
「まぁまぁ、愛紗、俺らはまだ無名だし」
「らってなんだ、らって、俺は有名になるつもりはない」
苛立つ黒髪、なだめる黒髪、不機嫌になる黒髪
おいおい、黒髪言いすぎてゲシュタルト崩壊しそうなんだが
「俺の名は曹仁だ、一端の礼儀を弁えてるんなら名乗れよ馬鹿ども」
とりあえず挑発しておく、うちの大将も面白そうな顔してるし
「な！ぐ…っ、せ、性は関、名は羽、字は雲長だ」
「えっと、性は北郷、名は一刀、字は無いんだ」
「…先にこちらの無礼を詫びておこう、すまない、俺の名は仁、字は無いし性を名乗る気はない」
「ええと…劉備って言います！それで、こっちの子が…」
「は、はいい！しょ、諸葛孔明と申しまふ！」
噛みやがった、軍師ポジションが噛みやがった
それと俺と同じ名前の黒髪は無視だ
挑発するならもっと上手くやんな、俺みたいなのには逆効果だってのとりあえず、なんとなくじっと諸葛亮を見つめる

「へ？ひぃ…」
怯えてるように見えるが相手はあの諸葛孔明、神算鬼謀の名を思うがままにする人物だ
噛んだのも、怯える姿もまたこちらへの騙しかもしれない
そう思い込み、それを眼力に込め、疑念を送り続ける…！
「あ、あの～朱里ちゃんが何かしましたか？」
劉備が語るが見るのをやめない、相手が目を逸らさないからだ
森で猛獣にあったら目をそらしてはいけないのだ
若干涙目にもなっているが、それでもやめない
本格的に泣くまで続けてやるんだ!!
「何をしているの、あなたは」
「うごっ!!」
後ろから思いっきり殴られた
「…今殴ったのは誰だ、いや、姉貴じゃないのは分かっている、そこのチビ共でもねぇ」
身長が足りないからな
「私だ!!」
元譲が胸を張ってドヤ顔している

そして若干姉貴が怒っている、俺にはわかる
だが、そんなことよりも、だ
「…そうか、覚えてろよ、どんな形にしても復讐してやる」
いじめてやるのが先だ
「ふ、ふん!!そんな脅しが通用するとでも…!」
「帰った時の仕事の量、絶対、どんな手を使ってでも増やしてやる…!」
「え、それは…やめてくれないか?」
ドヤ顔は鳴りを潜め、今じゃおあずけ食らった犬のように切なそうな顔している
「…立華様、あまり姉上をいじめないで欲しいのですが…」
「それに、また暴れて警備隊を叩きのめすのは無しよ」
ちっ、いいじゃねーかよ、食い逃げぐらい大目に見ろってんだ
「それで?なんであの子を見ていたのかしら?」
ものっそい笑顔で尋ねてくる姉、めっちゃ怖い、なんでだ?
これに関しては怒らせる要因は何一つないぞ?
「ん?ああ…んー?…なんとなくだな、泣かしたくなった」
いや、本当になんでだろ?ノリ…かな
そうだ、悪乗りだ、魔が差したってやつだな

「…小さい娘が好きなの？」
「いや全く、欠片も欲情しない」
諸葛亮は俺が即答したためか少なからず傷ついたようで、見るからに落ち込んでいる
両手を胸に当て
「小さいのがダメなのでしょうか」
などと呟いている、小さいのがダメなんじゃない小さいからダメなんだ、世間的に
しかし、こっちはこっちで
「ふぅーん…そう、そうなの」
と何故か怒っている、わけわかめだっての
「あのー…そろそろ私達は、むぐっ!!」
と、劉備が無謀にも鬼（姉貴）に話しかけようとしたので手で遮る
「今の姉貴に話しかけちゃいけねぇー…龍が怒り狂っているのに貢ぎ物を差し出したって焼き殺されるだけだ」
「ねぇ？それはどういう意味かしら」
なんか聞こえるが無視だ無視、今はこの死にたがりをどうにかするのが先だ
とは言え姉貴にこれ以上聴かれたらまずいので、聞こえないようにこっそりと耳打ちする

「こういう時は、相手の特徴を褒めたりして、どうにか機嫌をとってから話をすり替えるんだ、いいな？」

と真面目な顔して言えば、劉備も真面目な顔でこくりと頷く

だったら大丈夫だろう、そう思い手を離す

「…曹操さん！」

「…何かしら？」

そこで、溜めをつくり思い切った顔をして言った

「あの頭のクルクルって笑えるよな！って今私に曹仁さんが耳打ちしてきました!!あ、私たち帰りますね！それじゃ!!」

「このバカ野郎がっ!!!」

すり替えろって言ったんだ！擦り付けろとは言ってねぇ!!

「さー！早く帰るよ皆!!置いてっちゃうよ!!!」

「ま、待って下さい桃香様!!」

逃がすか!!って

「はっや!?」

言葉だけ置き去りにしていきやがった、あのクソアマ

強かってレベルじゃないぞ、やり口が極道そのものだ

「逃がすかよ!!」
「それはこちらの台詞よ、立華?」
　駆け出そうとした瞬間に両手両足ひとつずつに力自慢の武将が組み付く
　両足にチビ二人、右腕に元譲、左腕に波動拳使い
　しかも全員力のかけ方がばらばらで力づくにやると、殺す以外に抜け出す方法が無い
「あなた専用の組み付き方よ?光栄に思いなさい?」
「そうよ!!私を含めた軍師全員が2晩寝ずに考案したものよ!!」
　…いや、大丈夫なのか?この国、頭使わなきゃいけない奴がこんなくだらんことに2日もかけたってのかよ
「どうだ!逃げられんだろ」
「えへへ～いくら兄ちゃんでも無理でしょ～」
「怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない」
「…筋肉は普通なのか?…しかし、これは…」
　おい、一人発狂しかけてるし、一人はなんか変態的なこと言ってるってかやってるぞ?
　おい、俺の二の腕を揉むな、そういうのはそういう店でやってもらうからいいんだ
「…なんや?凪の様子、なんか変やないか?…」

「…ほんとなの～、なんか顔が赤いの～…」
おい、大丈夫なのか俺、流石に変態は嫌だぞ
「さて…覚悟はいいかしら？」
と気がつけば目の前には愛鎌『絶』を構えた姉がいる
「言い訳なら今のうちに聞いておくわよ」
目が語っている、聞くだけだ、と
「そうか、なら…聞いてくれ、姉貴」
「ええ、しっかりと聞いてあげるわ」
「前から思ってたんだ、そのクルクルさ…麗羽姉と同類に見えるからやめたほうがぶっ!!」
「どうして麗羽だけは真名で呼んでいるのよ!!」
喋ってるのに思いっきり切られました、ってか怒るとこそこかよ！
まぁ、痛みは超越してるからどうでもいいんだが、ね？
「どうして！どうして!!麗羽だけ今だに姉って呼ぶのよぉぉ!!!!」
…カリスマがかりすま（笑）になってしまっているのがやばいと思うんだ
やめろよ、姉貴…兵が見ている
あと元譲さん、腕が曲がっちゃいけない方向に曲がっているしそのせいでチビふたり

が怖がっているぞ
「…」
「しゅ、春蘭様!?ど、どうしたんですか!?」
「怖くない怖くな…ひぃ!!」
怯えたせいか力の方向が変わったようで…
ああ、俺の右足、粉々になってる…
「…おい、痛みは感じるのか?どうなんだ?」
おい、波動拳使い、死にたいのか
現在進行形で体の中心切り刻まれてんだ、耳元で呟くなってのってか、頭が復元した矢先に吹っ飛ばされてるから答えれねぇよ
「…うわぁ、なんや羨ましいような羨ましくないような…」
「絶対に羨ましくないのー、あんなに斬られたくないのー」
そうだろう?俺だってそうだよ
だがキサマらも許さん、口だけでさっきよりも離れて言ってるじゃねーか
畜生…今のところの癒しは止めようか止めまいか迷ってオロオロしてる妙才だよ…
俺、活躍したはずなんだけどなぁ?結構殺したはずだよ?なんでこんな目に会ってる

んだ？

実際、曹仁が殺した黄巾党は約２万

呂布と合わせ５万という黄巾党の半分の軍勢をこの二人で殲滅した

この事から呂布はその武を讃えられ『天下無双』と、曹仁はその不可解な殺害方法から『悪鬼無双』と謳われることになった

食事の時間

「まったく…ようやっと終わったよ…」
結局日が暮れてから姉貴が冷静になって、その場はお開き
通算６千飛んで４５４回殺された、大損もいいところだ
「さて…」
俺が今いるのは戦場の端っこ、駐屯してるところからも離れたところ
ここにいるのは俺と…
「始める前に…なんの用かは聞いておくかね？」
後ろに立っている先ほどの男、器用にも俺だけに対して殺意を当ててきた男
「…お前はどちらだ？」
仁とかいう男、実に面白い力を持っている
「どちらってのはよくわからねぇな」
特別な力は感じない、が、何かしらの術を身につけてる
「目覚めているか、いないか、そう聞けばわかるか？」
気配はあるが、極端に他と同化している

超がつく一級の暗殺者の類と同じ気配の溶かし方だ
「あ～…そういう…それなら、目覚めているぜ、ばっちりとな」
そう言ってようやく後ろへと向き直る
こういったのとは殺り合った事はないが…面白い結果にはなりそうだ
「そうか…すまないな、『意』を当てて反応がなかったからな、気になった」
「ああ…下手な挑発だと思えばそういう意味かい、ありゃあ」
「下手…か、そうだな、どうにも下手くそでな、苦労してるよ」
そう言って苦笑いをする仁
「で？それだけじゃないだろう？こんなところまで来たのは」
「ああ、そうだな…単刀直入に聞こうか、お前の力は『不死』だな？」
まぁ、微妙に違うがいいか
「いえーす、その通りだ、お前さんはなんだろうかね？暗殺系だとは思うが」
アサシンクリードだとか、そこらへんだとは思うんだがね
「そのことで話に来た」
「んん？」
一気に読めなくなったな、なんだ？いきなり殺しに来るってのはもうありえないしかと言って初対面になんか言われるほど派手に生きてはいないぞ

「同盟を…俺とお前の個人的な同盟を組んで欲しい」

「同盟ねぇ…」

「ああ、その通りだ」

こいつの説明をざっくばらんに整理すると

・転生者というのは何かしらこの世界の人間では不可能な能力を得ている

・その中には能力を無意識で使っていたりそのせいで迫害を受けている
・そういうのと会ったら保護、もしくは能力の自覚の助長をする
・同盟の条件はとある転生者の能力によって強制的に施行される
・同盟中は互いに害のあることは行わない

と、いうことなんだが
「はっきり言って旨みがねぇな」
「…だろうな、まぁ、俺としては最後のが重要であって他はどうでもいいからな」
「んー？ここには他にもいるのかい」
「ああ、だが、それらは個人的に会って話してくれ」
「誰だよ、そいつ」
「…少なくとも、劉備、あいつは転生者だ」
…あ？
「おいおい…待ってくれよ、ってぇことは」
「その通りだ、音に聞こえた武将でも転生者ということもあり得る」
ってことは姉貴や元譲もありえるってのか…やれやれ…
「だが、俺やお前のように目覚めなくては意味がないがな」

「なるほどねぇ…把握した」
「それで、同盟の方はどうする？俺と組むととりあえずだが劉備も組むと思うが」
「組む前に２つほど質問いいかい？」
「？なんだ？」
「いつ目覚めたか、お前の能力はってところだ」
　こいつを聞いておかねぇとな、組む組まないの問題外だっての
「…少し、長くなるが、いいか？」
「構わんよ」

　そうだな、目覚めたのは１４の頃だな
　お前も知っていると思うが、俺たち転生者が前世の記憶やらを思い出すのは大抵この体で形成された人格が精神的外傷を負った時、死にかけた時、そういった絶望を知った時だ
　俺の場合は実に簡単、目の前で賊に親を殺された、今の世の中じゃありきたりな出来事だ
　その時に俺は『目覚めた』、驚いたよ、自覚した瞬間に剣を振り下ろされそうになって

いたからね
まぁ、俺の能力を使って殺したんだが…ああ、能力の話もしないとな
俺が望んだのは『七夜志貴』だ
…なんだ？別にいいだろう？キャラクターを望んでも
まぁ、手にしたのは七夜の体術だけだったみたいだ、目覚める前の俺は快楽殺人主義者だったようだがね
しばらくの間は目覚める前の精神に引っ張られて殺すのが楽しくて仕方がなかったけども…
安心してくれ、今はそんなことはないからな

「ふむ、やっぱりそういった時になるんだなー」
「まぁ、大体はな、うちの劉備なんかは最初からだったらしいが」
「なんだそりゃ？」
「劉備に生まれたことが絶望なんだとさ、俺にも詳しくは話していないからな」
まぁ、そういうのもあるんだろーな、どうでもいいや
「そういえば、あんたはどうなんだ？」
「ああ？俺か？…そうさなぁ」

俺の場合か…
「寄る辺が無くなったら、甘ったれのガキにとっちゃ絶望だよな？」
「…なるほどね」
「理解してくれたようでなにより、とりあえず、同盟は保留だ」
「それが賢明だろうさ、俺も後悔しているからな」
同盟とやらがしっかりと機能してるならばここに来るのはコイツだけじゃねーだろうしな
「さて、それじゃやるかね」
「ふむ、離れたほうがよさそうだな」
「ああ、離れとけ、巻き込まれてもどうなるかわからねぇからな」
そう言って仁は軍が駐屯してる天幕へと歩いていく
俺は
「…食事の時間ってな」

戦場に流れる血が、流れ落ちた血が、轟く、蠢く
まるで川のように、まるで波のように
闇夜に紛れ、赤黒い河が出来上がり、我先へと一点へと集結する

気づけ馬鹿ども、俺の力を
震えろ人間ども、化物に
見ろ、これが俺という化物だ
感じろ、俺の力を！
「…クカカカカカ!!喰いきれるかねぇ！こいつは!!」

黄巾党１０万、総被害は６万、内４万は降伏した
対する官軍は５万、それでも１万強は死んだはずだ
全部、全部ゼンブぜんぶ!!俺のだ!!!
俺の糧であり、城であり、城壁であり、兵士であり、贄である
俺が望んだ力、俺の…俺の!!
「…そうだ、俺の…!!…紛い物の力！」
紛い物だ、全ては与えられたもの、だがそれがどうした
叶う人間はこの世にはいない、俺こそが天下一
だから、だからこそ
「誰にも邪魔はさせねぇ、否定も肯定もさせねぇ」
たとえ無間地獄を歩もうとも、悪鬼羅刹と罵られようとも

全てに拒絶されても、全てに否定されても
「俺は俺だ、本当の名前を忘れようと、もはやこの世の人間でなかろうと」
最後の最後まで生き延びて哂ってやる、ざまぁみろ、と

「ふわぁ～すごいねぇ～」
呑気に大口を開けながら、一人の男に血が集うのを見守る少女
「何が、すごいね～、だ、一人だけ死地に向かわせやがって」
傍らには悪態をつく青年が一人
「え～？仁だったら戦いになってもどうにか出来たでしょ？」
「無茶を言うなよ…お前のように使い勝手のいい能力じゃないんだ」
「私のも使い勝手がいいわけじゃないけどな～」
会話をしているうちにも血の河が男へと集っていく
「私の能力は、ちょっと動かす程度の能力だよ？あんなのをどうこうできるわけないよ」
「『動かせれば』なんでもだろ？空であれ大地であれ…人の心さえも動かせる」
少女は男から視線を外し、少年へと向ける
「それでも無理だよ」

「あれは城壁、あれは城、あれは兵士、あれは国そのもの
あれをどうにかするには、敵国の玉座までたどり着くのと同じくらい難しい」
そして少女は男の方へと向き直り
「しかも、暗殺とか策謀とか全く無しで、力尽くで行くしない、無理無理」
と半笑いを浮かべる
「…勝てないか？」
「勝つよ、勝たなくてはならない」
二人は男の所業を見つめている
「あんなものに負けてはならない、少なくとも私は屈してはならない」
少女はそれから視線を切り、後ろへと振り向きそのまま歩む
「お供しますよ、お姫様」
少年はそれに続く
「うん、最後までついてきてね？絶対に勝ってみせるから」
――劉備に生まれた私の存在意義をしめす為にも、ね

「うっぷ…食いすぎた、気持ち悪い…キモイ…うぇ…」

能力は！成長する!!

――黄巾の乱とかいわれた戦争もなんやかんやで終結し、人々は喜んでいます。
「ってな、馬鹿どもが…」
「どうしたんですかい？旦那、急に適当な語り口調で」
「んー？ほれ、あれ見てみろよ」
そう言って指差す先には喜色を浮かべる商人、穏やかな顔したほかの屋台の売り子達
「…？あれが何か？」
「どいつもこいつも気ぃ抜きすぎだっつの」
ああ、本当に阿呆ばかりだ、何にも考えちゃいねー
「いいことじゃねぇですか、賊がいなくなりゃ商売がやりやすくなって…そりゃ、皆笑顔になるでしょうに」
大将もわかっちゃいねーか…いや、この世界でわかる奴のほうが少ないか…
「いいかー？大将だから教えるけど、こんなもん一時的なもんだ、目聡いやつは今頃買溜めしてるぜ」
「はぁ…そりゃまたどうして…」

今のうちに売り買いしたほうが儲けるのに…なんて言っとる大将
確かに儲けれるが今の一時だけだ、そんなことができるのは
「いいか、黄巾なんつーおバカ集団が出たんだ、そりゃ退治されてめでてーの分かるが結局のところなんにも解決にはなっちゃいねーんだ」
「ってぇすると…また黄巾みたいなのが出るんですかい」
惜しいってか、そうじゃねーんだよなぁ
「あんなもん何処にだっていんだろ、ただ規模がでかかっただけの話だ」
「え?…あー言われてみりゃ確かに、賊がいなくなったことなんざ無いですわなぁ」
「そーそー、大事なのはそこじゃねーんだ、たかが規模がでかくなった賊に官軍が負けてたってことだ」
大将はそこらの屋台引いてるような奴らより賢いからもう分かるだろ
「…なるほど、そういうことですかい…参ったなぁ…」
「だーから俺は言ってるんだ、とっとと店持てって」
賊軍に負けるような官軍だ、力が無いって言っちまったよーなもんだ
野心だかなんだかが強い奴はこれを機に天下取ろうとするだろう、何せ国に力がないのは分かっちまったんだから

問題なのはそこらの諸侯のほとんどが野心９０の部下にしたくないタイプの奴らだってことだ

姉貴なんて多分全ステータス１００とか、パワーアップキットのオリジナル武将みたいな性能してやがるに違いない

「領主からふんだくった金があんだろ？俺を売った時のがよ」

「ええ、そりゃもうたんまりと」

この大将も侮れねーんだよな、姉貴から金ふんだくるとか…かなりの度胸がいるぞ？

「旦那の言うとおり、この際本腰入れて店でも構えますかねぇ…」

「あ、ここでやるのはおすすめしないぞ」

「そりゃまたどうし…ああ、そうでした、おっかないのが居ましたなぁ」

姉貴は本当にうるさいからね、こと飯に関してはとびっきりうるさい

「孫呉に行け、孫呉に、あっこなら文句言われねーから」

「いや、孫呉はなんか嫌な予感がするんですよねぇ…一般庶民用って店の看板にでも書きましょうかね…」

まじで大将すげー、孫呉行ったら行ったで受けねーからな、この料理は…ってか大将のやり方は、ここでも受けてねーし

「ちなみにさ、大将」

「は?なんですかい?」
「この肉何?焼いてあるのにすっごい硬いんだけど…」
「ああ、あそこで売ってる干し肉焼いたやつでさぁ」
　ぴっと指差した先には一山いくらで干し肉が置いてる
「…悪いこと言わねーからさ、他で店やりなぁ…ダメだって大将みてーのは」
「言わねーのがお約束でしょうよ、旦那」
　どんだけものぐさなんだ、このおっさんは…

「は〜…やだやだ」
　夜になったんで『店仕舞いですぜ、旦那』と追い出されてしまった
　普通飲み屋の屋台が夜に店仕舞いするかね?
「ま、そんだけ焦ってるのかもねぇ」
　懐からキセルを出し、能力で火を付ける

血を代価にすれば何でも出せる、この能力マジでチート
フーッと煙を吐き出しながら夜道を歩く、何気なく上を見ると
「お、新月か今日は…星が綺麗だねぇ」
生まれ変わる前じゃ滅多に見れない光景だ、ド田舎じゃなきゃ見れないな、これは
「…化物にも美しい等と言う感性はある…か」
「うるせーよ…ってか誰だお前」
気づけば目の前にいるのは一人の女、見たこともない奴だ
黒髪のショートボブ、肌は…暗いからよくわからんが多分浅黒い、身長は１７０ちょいかね？元譲ぐらいだ
胸もデカイ、スタイルもいい、顔は…わかんね、いかんせん暗い
手には無骨で大振りな直槍、服装は…ジ、ジーパンに革ジャンだと（多分）!?
「私の名は周倉、黄巾の生き残りだ」
「え…お、おう、いや…それよりもだな」
どこだ！どこで手に入れた!?この世界おかしいぞ！特にこういう服装関連!!
「お前を殺しに来た、化物」
言い切る前に直槍が俺の心臓を穿つ、暗いせいも相まって全く見えない
心臓を潰されると人間は前へと膝をつく、その時点ではまだ生きているため俺の能力

も発生しない
　俺が膝をつく前に槍は引き抜かれそのまま脳天へ、流石に癪なんでそれは後ろへ飛んで躱す
　見透かしたようにそのまま突っ込んでくる、呆れた、とんだ馬鹿がいたもんだ
「俺が化物ってわかってて挑むのかい!ええ!?人間!!」
　クレイモア風の諸刃の大剣…クレイモアでいいや、を取り出してそのまま鍔競り合いになる
「ああ、その通りだよ化物!私達のような化物は居てはいけないんだ!」
　徐々に力負けをしていく、そんなはずはないのに、今の俺の力は１２万飛んで１…えっと、２４００ぐらい
　それだけの人間集めて綱引きしても同等の力を持っているというのに…なんだこいつは…
「おい…女…」
　なんなんだこいつは…
「くっ…押し切れん…だと…!?」
　焦っているのか驚いてるのか、あるいはその両方か…どちらでもいいが
「お前…面白ぇよ…」

俺に適う奴なんざ、居ないと思ってたんだがなぁ…
「だからよ」
そんなお前だからこそ、全力でやってやるよ

新月の闇夜の中、住民区から外れた貧困層が住む貧民街の一角で男と女が戦っていた
女はその体躯に見合わぬ大振りな直槍を用いて、幾度となく男を貫く
男はその体躯を活かし、貫かれながらも拳を振るう
女は拳を受けるも、傷付く様子もなく男に挑み
男は三日月のような笑みを浮かべながら女を殴りつける
槍が振るわれる、常人の目では写ることさえ許され無い、まさに神速とも呼べる速度で
拳が振るわれる、常人ならばその一撃で粉々になるであろう、化物の一撃が
されど女は倒れず、されど男は死なず
延々と同じことが繰り返されていく
およそ、人の形をしたものが行える戦いとも言えないこの現象の中、男に焦りが出始めた

男の力は確かに強力だ、『命を代価とする』、男の認識では己の命でさえ他の命を差し出せば賄えるのだから
しかし、男の力は『代価』ありきのもの、つまりは有限なのだ
殺される度に人間一人分の力が弱まっていく
男は女の力を知らない、女は只ひたすらに男を貫いていくだけだ
槍を振るう、男の目にも写らない、そして貫かれる
拳を振るう、女の体は砕けない、そしてまた貫かれる
男は僅かに恐怖を抱いていた、まさか自分が殺されるとも思いもしていなかった
当たり前である、自らが最強と思っていた力が敗れるかも知らないのだから
男は愉しんでいた、自らを殺せる存在が湧くかのように現れたことに
男の内心は焦りがあった、しかし男は笑っていた、ずっとずっと笑っていた
「何が面白い」
戦いの最中女は尋ねる、力が最初より若干弱まっていることに女は気づいていたなのに、この男は笑い続けている、不気味で仕方がなかった
「逆に問おう、なぜ笑わない?」
男は答える、さも当然かのように
「殺し合いをしているんだ、笑えるわけがないだろう」

女も答える、当たり前だと
その答えに男は大声で笑う、可笑しなものを見つけた子供のように
突然と笑うことをやめた男は言う
「糞みたいな俺達が、他人に特別をねだった俺達が、その特別を使ってる時以外にいつ笑うんだよ」
男は語る
結局のところ、自分達のような力を持ったのは他人を見下したいがためにねだったのさ
そうじゃなきゃ、転生する時に『特別な力』なんて望むわけがない
お前も俺も、見下したいから貰ったんだ、見下されてたからこそ貰ったんだ
才能、努力、生まれ、育ち、そんなものに左右されない『特別』をアレにねだったんだ
その時点で俺等は人間じゃねぇ、才能を磨くことも、努力を重ねることも、生まれを誇ることも、育ちを経験することも
その全てを放棄した存在だ、だからこその化物、だからこその英雄だ
一片でも人間でありたいと思った奴は、平和な人生歩みたいと思ったらよ
アレにこう願うのさ、『平和な世界に生んでください』ってなぁ！

そう語り男はまた笑う、女はそれを嘲りと感じた
その通りだ、そう思った自分がいるから
化物を殺した英雄と言われたがってた自分がいたから
男は続ける
「それによぉ…お前の能力、予想がついたぜ?…お前『時間を操ってる』な?」
女にとってその推理は図星であった、女の能力は『時を操る能力』
神速の槍は、槍と己の体の時間を加速させたもの
女の体が砕けないのは、自らの体の時間を止めているから
男と拮抗したのは、男の時間を少しずつ戻していたから
「だから…だからどうしたというのだ、わかったところで攻略はできまい」
痩せ我慢だった、女のこの力は同時に発動できないのである
同時に発動しているように見せかけているだけだ
どこぞの吸血鬼のように女は世界の時を止めて、その中を動くことはできない
あくまでも『時を操る』、それだけの力だ
「いやいや…攻略は可能だぜ?…俺の能力、知ってるか?」
男がそう言った瞬間、世界が止まった
女は焦った、自分は止めていないのになぜ止まっているのか?

それ以上に『何故あの男は動いているのか？』
「俺の力は『血を代価とする能力』、代価として払った後に得るものに制限はかけちゃいねぇ」
絶句としか言いようがなかった、そんなのありなのか、と
「惜しかったなぁ？俺の力があの吸血鬼のそれを超えたアレンジじゃなきゃお前の勝ちだったのによ」
既に女の眼前まで男は歩いてきている
大丈夫だ、止まった時の中ではどんな物質も破壊はできない、あの吸血鬼のそれとは違うんだ
女は自分に言い聞かせる、散々試した自分の力だ、それの真似事ならば、と
「なぁ、お前忘れてるだろ」
しかし、それすらも男の前では無意味だった
「止めることができればよ、『戻すこと』だって可能だよな？例えばお前さんが加速してる時とか、な」
女は理解した、ここで死ぬのだと
女は否定したかった、こんなところで死にたくないと
命乞いをしたかった、まだやることがあるのだと

「ま、イイ線いってたと思うよ、お前さんは…敗因は、俺に気づかせちまったことだな」
なんといえば許してもらえるのだろうか?いや、許されない、どうやって逃げる?
逃げれない、止められたら終わり、どうする?どうするどうするどうするどうする―
―
そこで、女の理性は一度決壊した

いや、あの、ちょっと待てや
「うぐっ…ひっぐ…ズズッ…」
気付いた後、時間止めてネタばらししてから「さぁぶん殴ろう」って思った矢先にこ

れだよ？
時間止めるのは消費が半端じゃないから、とっとと終わらせようとしたらこれだよ？
「ひぃ…ゆ、ゆるいてぇ…えっぐ…」
このアマ泣きやがった!!
散々余裕ぶってたくせに、手札無くなった途端にこれだよ、どんだけ豆腐メンタルなんだよ！
「あーっとな…」
「ひぃ！」
うっとおしい事この上ない、なんだったんだよさっきまでの空気は
久々に真面目な戦闘かと思ったら、まさかのこんなオチかよ
「…白けた、帰るわ」
「…へぇ？」
あーダメだ、全然ダメだ
泣いてる奴ぶん殴るとかは前世でもダメだった
そいつがどうしようもないクズなら躊躇わないんだがなぁ…
どうにもそうじゃない場合は踏み切れねー
「あ…」

「てめーもとっとと帰れ、これ以上俺をセンチな気分にさせるな」
そうだ、隣の席にいたいじめられっ子の山下君を思い出すんだ
いじめっ子だった奴の太腿にペーパーナイフぶっ刺してどっか行ったけなー…元気かなー…
…ああ、クソッ…人間じゃねーだのなんだの言って、なんか俺が一番人間臭いんじゃねーか？
「あー…無駄だった」
一気に1万ぐらい持ってかれたんだけど…これ、どこで補填すりゃいいんだよ

～後日～

「あ…あの、お世話になります…」

目の前にいるのはこの前の…周倉とか名乗った女

そして、俺の住んでる長屋の大家さんの奥さん（実際はこの人が大家さん）

「ごめんなさいね～仁ちゃん、この子どうしてもっていうから～」

間延びした声が特徴的…どこぞの軍師と被るが全く関係ない

「いや…ってか、なんでまた相部屋なんか…」

「えっと…その…なんでと言われると…その…」

モジモジし始めた周倉、てめーには聞いてねー

あらあらとか言ってる大家さん…の奥さん

「あの…奥さん、俺家賃ちゃんと払ってますよね？なんでまた…」

「ああ～、仁ちゃんもう払わなくてもいいわよ～？」

「はい？」

「この娘がね～、ここの長屋建て替えてもね～数年ぐらい払ってもらわなくてもいいぐらいお金くれたの～」
あ、はぁ、さいですか
…結局世の中金ですか…世知辛ぇ…
「そういうことで～よろしくね～」
大家さんの奥さんはそう言って自分の家へと戻り
目の前には上目遣いでこっちを見てくる周倉
暗くて分からなかったが美人だ、それこそ姉貴の周りの連中に引けは取らない
「あの…真名は咲夜と言います、ふ、ふつつかものですが、よろしくお願いします!」
つが一個多いぞ、おい、しかも真名に何の捻りもないぞ、あといきなり預けるなよ殺そうとしたやつに…
ダメだ、ツッコミしかでてこねぇや
…あれか?吊り橋効果ってやつなのか?流石に惚れられてるのわからんほど朴念仁じゃないが…
「あー…うん、いいか、俺の真名は立華だ、よろしく…まぁ、入れよ」
「は、はい!」
パァっという擬音とたんぽぽ地味たお花が舞っている幻覚を見つつ部屋の中に入れ

る

据え膳食わぬは男の恥とも言いますし…ま、たまにはいいよね、こういうのも

さらに後日、ふざけて姉貴たちにに婚約者として紹介したら姉貴と元譲が猛禽類の顔をしました

あいつら絶対に転生者だろ…トリトリの実の使い手だよ、まじおっかねぇ…

幕巻『狂人』

私は生前はただの女子学生だった
冗談を言い会える友達がいた、公務員になった姉がいた、よく懐いてくる運動のできる弟がいた
優しい母がいた、厳しくも気遣ってくれる父がいた、何ら不満のない恵まれた環境だった
だから、悪いのは私なのだろう
私の頭の中が腐っていたのだろう
誰にも言えない秘密があった、多分、誰もが持つであろう、味わうであろう虚無感
私の頭の中はそれでいっぱいだった
友人に笑いかけても、姉に飽きられても、弟に笑われても、母に気遣われても、父に叱りつけられても
私の中は常に空っぽだった
何が不満とか、将来が不安とかじゃなく、漠然と『足りない』と感じていた
だから、あんなことをしたのだろう

母は泣いているだろうか？父はどんな顔しているのだろうか？
姉は？弟は？友人は？…考えるたびにどうでもいいと結論を出す私の頭はやはり腐っているのだろう
私は人を殺した、何人という話ではなく、何万という単位で
実行は簡単だった、ちょっとした爆弾をたくさん夏と冬に開かれるお祭りの日にばら撒いただけだ
逃げられないように入口から順番に、念入りに
抵抗してきた人もいたけど、ボウガンは免許証があれば買えるものだということを私は知っていた
みんな逃げた、多分取りこぼした人もいるんだろう
これといった理由はなかった、ただ、『やってはいけないこと』をすれば何かが変わるんじゃないかな、と
そう思ったから行動に移しただけ
心残りだったのは最後は自爆するつもりだったのに、ボウガンで射ち抜いた男がその矢で私の喉を突き刺したことだ

素敵な笑顔だったから、つい私も笑ってしまった

あの人も私に似て腐っていたんだと思う

死んだ私は不思議な存在に会った
望みをひとつ叶えて別の世界に蘇らせてくれるという
それを鼻で笑い、奇妙な夢を見てると思い込み
そして、望んだことは「なんでも動かせるようにして欲しい」
そう望んだ、空も、大地も、人も、心も、なんでも自由に動かすことができればそれこそなんでもできる
なんでもできるのなら、この虚無感が消えると信じて
言った瞬間に光がぱっとして、私の意識は暗転した

次に目が覚めたときは、女の人の死体があった
やせ細っていたから多分餓死なんだろう
次に記憶が流れ込んできた
自分の名前、女の人—母親の名前
彼女がどうして死んだのか、自分を生い立ち、やってきたこと
様々の記憶が流れ込んできた

私はその日から劉備になった

目覚める前の私は争いごとが嫌いだったようだ、剣を持つことすら忌避していた
今の私は違う、剣もそこらの賊程度なら一刀で切り捨てれるし
弓や槍、特殊な武器以外ならば大抵は人並み以上に扱える
目覚める前の私はとても優しかったようだ、自らの食事を孤児に与え餓死しかけるほどに
今の私は違う、孤児が縋り付いてきても蹴飛ばすなり殺すなりする
蹴飛ばす孤児はまだ余裕があるし、殺すのはもうダメだから楽にしてあげている
目覚める前の私は世界を変えたかったようだ、皆が笑える世界を作りたいと思っていた
…今の私は…その通りに動いている
面白いと、生前から今までで初めて面白いと思った
笑顔は様々な形で生まれるものだ、その全てを与える存在になろうというのだ
面白い、面白すぎる、空虚な私の器にようやく水が入った、満たされていくこの感覚
いいよ、桃香、やってやろう、そんなの無理だという人間も、素晴らしいと付いてくる人間も

皆を笑顔にさせてあげよう、たとえ私達が笑えなくても
必ず全人類が一斉に笑う世界を作ろう
そして私は旅に出た、母が死んでから私は村でも気が狂ったと疎まれていた、ちょうどいい

賊を殺し路銀を稼いでるとき、殺すはずの賊が皆死んでいた
ただその中にぽつんと少年が佇んでいた
くるりとこちらを向き
「…逃げるなら…いや、もう遅いか」
言い終わった時には私の目の前にいた、とても早くて、不思議な動きをする少年だった
「…カッコ悪いね」
私の能力の前には無力だけど、彼の体を地面の方向に動かし続ければ当然動けなくなるのだから
この子から私と同じ存在が居ることを知った
この子には私の目的を話した、その本当の意味も
この子の心は動かしていない、だけどこの子は私についてきてくれるようだ

「あんたの作る世界、矛盾なんて言葉が霞むような世界を見てみたい」

その後、関羽である愛紗、張飛である鈴々に出会った
二人共いい子だ、私の目的だけを話したらそれだけで付いてきてくれるみたいだ
４人で旅をした、黄巾が動き始めていた時期だったので旅をしながら義勇兵を募った
その途中で諸葛亮と鳳統と出会った、二人共快く仲間になってくれた
ついでにだが天の御使いとかいう胡散臭いのもついてきた、別段これに関してはどうでもいい
神輿がいてもいなくても、どうとにでもなるから
募った義勇兵も多く、一旗揚げる為にも黄巾党討伐に参加することとなった

そんな時だった、あの人にあったのは

最初、曹操の軍幕で出会ってはっきりとわかった
前世で私を殺した人だと、もしくはそれと同類なのだと、私と同じなのだと
二度目は戦場で、笑いながら殺してた、子供が玩具で遊んで笑うように

楽しい、楽しいって笑ってた
どうにか味方にできないか、一瞬で否定し能力を使う
でも効かなかった、私の能力は個人にしか、一人にしか、一つにしか効かない
あの人に使った瞬間、別の何かに適用されてしまった
あの子を彼と接触させて得た情報の通りなら、彼の中にはひとつの世界が生まれてるはずなのだ
そして彼はその世界の神様、自らの世界の中ならばなんだってできる
人を生み出す事も、兵器を生み出すことも、自分の代わりに殺させることだって
能力が通用しなかった今、はっきりと決めたことがひとつだけ
彼は殺す、彼は私の世界にいてはならない
私の手によって生み出す世界に、彼のような存在は許されない
桃香も賛同してくれた、最初はあの人もと言ってたけど…
戦場の彼を見てそれは間違えだと気づいてくれた

彼は哂ってた、ほかの人間の脆さを、仮初の自分のことを
まるで私を見ているかのようだった、だからダメだ
私の世界には私はいてはいけない、狂気の世界に狂気の王様はいてはいけないんだ

そんなものがいれば、必ずいつか『正気』の人間が気づいてしまう
そして世界がこわれてしまうから
ほかの誰が果たしても構わないけども、もしそれがかなわないのならば…

「うん、私たちでどうにかしよう？…大丈夫！愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも藤堂君だっているんだから、ね？――ちゃん！」
私と桃香は別人、二人で一人、だから大丈夫
狂人と狂人がひとつになったのだから、そこいらの狂人に負けはしないよ

――待っててね、化物、必ず殺してあげるから

努力

「おーおー・・・よくもまぁ飽きずに集まるものだな」
　ひとりの女が城壁から遠く、カビのごとく広がる大群を見下ろす
　反董卓連合と名付けられた、自分たちの敵を
「しっかし、惨めなもんだね、そんなに名誉が欲しいのかい」
　呆れたように呟き、胡座をしながら煙管を口に咥え、ぷかりと煙を吐き出す
　ふと眼下を見れば見たことあるような女がこちらに向かって喚いている
「降りて来い！華雄!!それともこの後に及んで怖気付いたか!!」
　孫家の娘だ、目が覚める前に負けてしまった女の娘だ
「お～・・・孫堅の娘か・・・大きくなったな～」
　目を細め薄く笑う、舐められてると思ったのか傍目から見てもわかる怒気がこちらへ向かってくる
「・・・貴様！馬鹿にしているのか!!」
　その言葉もへらりと笑いながら返す
「そりゃバカにもするさ」

「何を・・・!」
次の瞬間には
「既に間合いだーよ」
女が乗っていた馬の首から先が消し飛んでいた
突如としてバランスを失い倒れる馬を踏みつけ後方へと跳ねる女
「あっはっはっはっは!降りる必要なんて無いだろう?」
笑う華雄、女は驚きつい尋ねる
「・・・驚いた、あなたも妖術を使うのね・・・」
その言葉に咄嗟に答える
「あんなインチキ共と一緒にするなって、こいつは自力だよ」
「え・・・?」
「こうやって・・・さ」
いつの間にか手にしていた斧を振るう
次には女が立っている場所から少し離れたところが消えるかのように抉られていた
女は唖然として抉られた地面を見て華雄を再び見た
しばらく見つめ合い、そして華雄が口を開く
「孫堅の娘よ、私が好きな言葉をひとつ教えてやろう」

「『努力したものが成功するとは限らない。しかし、成功するものは須く努力を重ねている』」
　そして華雄はにやりと笑う
「お前が妖術と呼ぶものが私の中にあるとするなら、それは、さ」

――努力が私を裏切らないってことだけさ――

「あれをどう見る？立華」
「どうって言われてもなぁ・・・」
　あの華雄さんって転生者だね、なんて言えねぇっての
「俺並みの化物・・・かね？とりあえず、あれが人間の到達できる場所じゃないってこと

は確かだな」
「そう・・・ね、これは思いもよらなかったわね」
そりゃ、そうだ
猛将って触れ込みだからどうにかなると思っててこんなの出てきちゃたまらんわ
「ってかさー姉貴よー」
「・・・何？いま少し忙しいのだけど？」
「なんで俺連れてこられてんだ？」
寝て起きたら既にここにいたのだけど？一体どういうことだってばよ
「・・・そうね、答え合わせならあなたが連れてきた『奥さん』に聞けばいいんじゃない？」
奥さんの部分で尋常じゃ無い殺気ぶつけられたんすけど
え？何？俺って自分の意志で嫁さん選んじゃいけないぐらいの立場だっけ？
「・・・あ、あぁ、そうするよ、邪魔したな」
エマージェンシー!!!殺気が3倍以上に膨れ上がったぁぁぁぁ!!!!!

その場を素早く脱出し、咲夜を探す
幸いなことにこの世界においても咲夜の背格好は結構目立つのでいればすぐ見つか

る

「・・・と思ってたらさぁ・・・」

「分隊ごとに被害報告を急いで、武具の損耗もついでに報告するように」

なんか小隊長チックなことやってるんですよね、うちの嫁（？）

「あら？もう戻ったんですね、立華様」

「あー・・・うん、戻ってこれたよ、うん・・・」

問題はそこではない

「で、お前は何してはるの？」

「え？ええ、何もしないのもアレですから、なにかお仕事をと言いましたら義姉さんに小隊を任されまして・・・」

あー、姉貴取り込む気か

「あ、そう・・・で、そっちのギラッギラしてるのは？」

それはまぁ後でどうにかするとして問題は咲夜の横で滅茶苦茶ぎらついた目をしてこっち見てくる銀髪娘だ

「え？ええ・・・副長として付けられたのだけど・・・」

「楽文謙と申します。真名は凪です」

「・・・はい？」
いきなり真名を預けてきやがった!?
おいおいおい、（この世界の）常識的に考えてありえないぞ!?
「ああ、返しは結構です、ただあなたにだけはどうしても受け取って欲しかった」
モテ期ってぇやつですかい!?って冗談も程々にしといて・・・
「あー・・・んー・・・そうだな、俺の真名は立華だ」
今度は咲夜が驚いてこちらを見てくるが、そうしなくちゃいかんのよ
こういう目をしたやつには更に言っておかなきゃいけない
「凪だっけ？」
「ええ、あなたは立華様でよろしいでしょうか」
「立華でいいさ、真名っつっても俺からすりゃ仇名に近い」
「そうですか」
しばしの無言、その間じっと見続ける
ぎらつきは消えやしない、若干増したかのようにも思える
最初に口を開いたのは凪、かぶせるように口を開いたのが俺だった
「いつか、いつの日か・・・あなたを――」
「いつでもだ、いつになってもいい――」

――殺します／殺してみろ――

そこからも無言、ただ互いに笑い合っていた
傍から見れば獰猛な笑みだと言われること請け合いだが、俺にしてみりゃ違った
こいつの笑みも、ぎらついた目も、何もかもがあの女共に似ている
劉備に、孫策に、甘寧に・・・
そして、いつの日か会った
この戦争の原因とも言える女、董卓――月に――
どいつもこいつもこんなだ
どうすれば俺を殺せるのか？って虎視眈々頭の中で練ってやがる
ってかほとんどが女っていうのが恐ろしい
なんなのこの世界？アマゾネスしかいねーのか
「まぁ、なんだ、当分先の話だ、気長に待ってるよ」
ここでも俺はお邪魔のようだし、退散しますかね
「ええ、一生をかけて当たらせて頂きます」
既に背を向けているから断言はできんが、絶対に晒ってやがるな

まぁったく・・・どいつもこいつも

「やれるもんならやってみやがれ、畜生共が…二度も殺られると思うなよ…？」

場は変わり戦場

圧倒的な力を見せつけていた華雄は当初、汜水関に篭城し連合軍を足止めするはずだった

初めはうまくいっていた、寄ってくる雑兵を壁上から吹き飛ばし、射掛けられる数千

の矢を薙ぎ払っていた
　しかし、一人の男の登場によって華雄は地に足をつけ戦わねばならなくなっていた
「マァァックス・スピィィィドォォォ!!」
　全身のほとんどが赤に染められ、顔を隠した男によって
「クッ！舐めるなぁ!!」
　神速と呼ばれてもおかしくない速度で斧を振るうもその男には当たらず
「遅ぉい!!」
「ぐぅ…!!」
　逆にその隙を突かれ攻撃を受けるの繰り返し
　ただ華雄にとって幸運だったのはその男が素手なのと、その攻撃はたいしたものではなく致命的ではないことだった
　それでも同じ箇所を打たれればダメージは蓄積されていく
「えぇい、うっとおしい!!」
「ヒーローにそんな攻撃当たるかよ!!」
　ヒュウン、と斧の風切り音にしてはあまりにも軽い音がするかと思えば男は１０歩ほど離れた距離にいる
　華雄は斧の柄を地面に突き刺し口を開く

「…はぁ、お前も転生者か」
「そうだ、転生者でヒーローさ！」
華雄の陣営にも何人か居り、自分も含め頭がどこかおかしい連中だとは思っていたがここまでのものとなると流石に頭痛がしてきてい
た
「そうかい…ヒーローね…で、名前は？」
「ん？名乗ってなかったか!?ヒーローとしてあるまじき失態ッ！すまなかった!!」
丁寧にお辞儀までする男、華雄は何故この男に苦戦しているのか理解ができなかった
「俺の名前は伍延（ごえん）!!ヒーローだ!!」
「そうか、伍延…ただの転生者と侮っていた事をまず詫びよう」
その言葉にうむ、と頷く伍延
「ただ、そちらも詫びて欲しい…なぜ武器を持たない？舐めているのか？」
華雄としては別段どうでもよかったが、華雄の体が休憩を欲していた
そのための時間稼ぎでもあったが、どうでもいいながらもふとした疑問でもあった
「俺が素手の理由か？簡単だ！俺の憧れるヒーローは皆素手で戦っているからだ!!」
そう言い放ち、腰に手を当て高らかに笑う伍延
その姿を見て呆れる華雄と取り囲んで様子を伺っていた連合軍の兵士たち

「あ、ああ、そうなのか…うん、えっとだな、例えばどういったヒーローなんだ？」
　体力の回復のために話を続けさせようとすると
「おお！聞いてくれるか!!そうだな、やっぱり最初に来るのはスーパーマンだ！なんといっても元祖ヒーローだからな!!」
　他にも…と、次々にアメコミのヒーローや週刊少年誌のヒーローを挙げていく伍延
　ほかに聞いてくれる人間がいなかったのか、よく見ると隠れている顔の瞳が若干キラキラとしているようにも見えないでもない
　既に華雄の体力は戻っているし、今なら斬りかかっても避ける間も無いだろう
　しかし、華雄は彼の話を聞き続けていた
「ウルヴァリンも好きだなー、悪ぶっていても根っからの善人っていうのもかっこいい!!」
「あ、それはわかるな、やっぱり理由なく人助けするにしても普段とイメージかけ離れているとかっこいい感じするよな」
「だよな!?いやーわかってくれて嬉しいぜ」
　華雄も転生前はそういったヒーローに憧れていた、こうなりたい、その一心で体を鍛え続けたりもした
　ただ、転生前も女の体であり、どうしても筋力がつかなかったため渋々諦めていた部

分があった
目の前の男は諦めずにこの世界においても憧れを追い続けている
「む…？」
「でだなー…ん？どうした？」
「いや…なんでもない、続けてくれ」
おう、と返事を返し話し続ける男
華雄は話を聞きながらも自身へと問いかけていた
今、自分はこの男を殺せるのか？殺すことが出来るのか？
武人としてあった華雄は出来ると断言している
転生者である華雄は殺したくないと叫んでいる
転生者の中に自分以外に努力を重ねている人間はそう多くない
少なくとも自陣営の中では自身ともう一人しか知らない
女としての華雄は、できるならば自分を理解してくれる男と結ばれたくもあった
目の前にいる男はどうだ？
確かに、能力はどこかから持ってきたものだろう
では能力を用いた攻撃、回避はどうだ？
実際彼の体捌きは見事なものだったし、攻撃も的確であった

ただ、能力を得ただけでは会得できない領域に達している
少々純過ぎるところがあるとはいえ、自身の理想に近い男だ
ほんの僅かな躊躇い、頭を振ってその躊躇いを消す
「その銃弾をだな…お?どうした、頭なんか振って」
ここは戦場で、自分は武人で将軍だ
彼は討つべき敵だ、私情を挟むなどもってのほかだろう
「いや、な…そろそろお開きにしようかと思って…なっ!!」
感情を払うように、斧を振るう
華雄の目には斧の刃が完全に彼の頭部を捉え、あとは吹き飛ぶだけの状態だった
パァァァン、と高く音が鳴ったかと思えば、吹き飛んでいたのは振るった斧だった
「なぁっ!?」
驚き固まる華雄、笑みを浮かべる伍延
「ヒーローたるものいついかなる時も油断はしないものさ」
まぁ、くらうときはくらうけどね、と肩をすくめて言う伍延
次の瞬間には華雄の懐に潜り込み、鳩尾にズドンと音がする一撃を叩き込む
「げぇあ…!」
たまらず体をくの字に曲げる、伍延はその瞬間を見逃さず首筋に手刀を叩き込む

「あ…ぐ……っ、殺せ…」
そう呟き地面へと前のめりに崩れる華雄
そして地面に崩れる前に体を受け止め、担いで自陣営に戻る伍延
「殺しはしないさ、心に愛がなけりゃスーパーヒーローになれないからな」
呟きにそう返し、鼻歌交じり伍延は歩き出した
赤い旗が靡く、自分のイメージカラーまっしぐらの陣営へと
余談ではあるが、彼が所属する陣営を決める時につぶやいた一言は
「やっぱ赤だよな、赤い奴は3倍だって言うし」
だったそうな

新月には星がよく見える、そう、あの北斗七星の脇に（ｒｙ

袁術の客将である孫策、その配下の武将『伍延』により汜水関を守っていた敵将、華雄を召捕ることに成功した連合軍

しかし、それに至るまでの代償は決して安いものではなかった

当初は総勢約２０万という驚異の頭数を持っていた連合軍であったが、汜水関を突破するにあたって失った兵数は４万

その内２万は華雄の籠城によるものであり、残り２万も華雄が引き連れていた手勢６千に削られていた

その理由というのも、わずか６千で連合軍を相手に耐え切れるわけがない、と華雄を下した際に連合軍の総司令でもある袁紹が全軍突撃の指令を下したためでもある

このことに対して華雄は

「間違ってはいないが、間違いだ、そこらの雑兵でどうこうできるほど柔じゃないさ」

とせせら笑った

結果として、籠城を続けた敵兵６千は華雄の評価に違わぬ活躍を発揮し見事連合軍２万を打倒したのである

「で、実際のところはどうなんだよ、咲夜ちゃんよー？」

頭の中でプロローグ的なものを語りつつ唐突に質問してみる

「えっ？あ、はい、戦闘不能が全体の４万といってもほとんどが袁家の兵士なので別段損害らしい損害はないですね」

とのこと、ちなみにダントツで練度が低いのが袁術軍、その次にかなりの差がついて各諸侯が並んでいってる感じ

「あいつら、すぐ死ぬもんな～、なんでか鎧もあっという間に砕けるし」

質の低い装備に質の低い兵隊、おまけに率いる将も一部除いて並以下と来たもんだ

ところ変わって姉貴の兵隊は練度も装備も一級品、軍隊として動くことにかけちゃ連合の中じゃ一番かね

「あー…そういや麗…袁紹の軍はどうよ？」

「ああ、不思議と損害はないようですね、不思議と」

あ、そう、で会話を切る

ぶっちゃけ、麗羽姉は慢心と名家っていうのに胡座かかなきゃ王様としちゃ優秀な方

だ

乱世では暗愚と言われるのは治世では名君となる、上の人間がどっしり構えりゃ下も安心できるってもんだ

まぁ、色々と口出しもしたし、これで弱かったらなんであそこにいたかわかりゃしねーや

「あ、見えてきましたよ」

そうこうしてるうちに２つ目の難関、虎牢関が見えてくる

「あーあ…着いちまったよ…やだなー帰りたいなー」

「何を子供みたいなこと言ってるんですか…」

「薄汚い大人になるぐらいなら、無邪気な子供のままでいたい…」

「もう十分に汚れてるから大人ですね、さ、行きますよ」

ドナドナよろしく、引っ張られていく俺

しっかし、本当に嫌だね、多分俺の予感じゃここで出張ってくるはずなんだ

そうだろ？潔癖症かつ差別主義者の月さんよ？

彼と私があったのは１０年ぐらい前、その時は確か故郷の端に住み着き始めた北方民族のところに赴こうとしていた時だった
馬を走らせ、酒や干し肉を積み、顔も知らぬ北方の民族に赴く私は領民からは随分気味悪がられてた
この整った容姿が余計に際立たせていたのだろう
しかし、なんのツテもなく見知らぬ土地に住み込もう等と、余程のことがない限りはありえないことだ
せめて、私だけは味方であるように、偽善と呼ばれてもいい
それでも何かと思い立っての行動だった

１０人の護衛と共に赴いて、着いた時に見たのは戦火だった

火が付けられた簡素な民家、殺され食えないようにボロボロにされた家畜、家の前で泣いているのは親子か、女性が子供を抱きしめながら泣いている

「仲穎様!!」

声をかけられ気が付く、家の裏手から剣戟の音と、僅かな悲鳴が聞こえる

積荷をその場で解き、佩いていた剣を抜き家の裏手へと馬を走らせる

私を先頭に護衛も続く、私よりは弱いがそこらの雑兵よりかは強いから役に立たないことはないだろう

裏手に回り込み、見た光景は見た事もないような光景であった

１５，６人の男達――騎馬民族の格好をしている――が一人の男を囲っていた

男の足元には腕から血を流している男が一人、縋り付くように男の脚にしがみついていた

男は足元の男と何か会話しているようだった、今思えばこの時に止めていれば良かった

男は頷き、しがみついていた男に手を差し伸べる

そしてその手で男の首を刎ねた
頭が無くなった首から吹き出すように、いや、吹き出しながら出る血を男は嬉しそうに浴びていた
囲んでいた男たちが口々に叫ぶ、だがあちらの言葉なのだろう私はなんと言っているかわからなかったが、あとで護衛の一人が教えてくれた
口々に、化物、と言ったあとに悪態をついていたようだった
一人が男に向かい槍を突き出す
――私にとって人生最大の不覚だろう、この時は私はアレを心配してしまったのだから――
槍は男の躰を貫いた、他のも続いて各々が持つ武器を男に振るった
唖然としていた私を含め、護衛も男が死んだと思い、自分たちが何故剣を片手に持っているかを思い出し馬を走らせようとした
その時だった、男の躰が弾けたのだ
頭だけを残し、全てが弾けた、次の瞬間には囲んでいた男達の、中でも一番遠くにいた男の背後に立っていた
――化物相手にしてるんだ、覚悟は出来ているよな?――
これでもか、と底冷えした声だった

呟くような低い声にも関わらず、馬を走らせるほどに距離が開いているにも関わらず、聞き取れた、聞き取ってしまった
そこから先は一方的な蹂躙、一方的な虐殺
力任せに体を縦に裂かれる者、抱きしめられグシャグシャに壊される者、武器を持つ手を握られ己の首をゆっくりと貫かさせられる者
一人として同じ殺し方をしていなかった、どれもゆっくりと自分の死に際が分かるような殺し方だった
そこで私は『目覚めた』
だけどあまり覚えてはいない、覚えているのは『目覚めた』事と『アレを殺す』と決心したという事
気が付けば家に帰っていた
護衛の一人にあの後どうなったかと聞けば
「…我々以外、皆殺しにされていました…家の前にいた親子も…」
と悔やむ顔で告げてくれた
よく見れば涙を流した跡がある、少し嬉しく思ってしまった
いるじゃないか、私以外にも『そういった気持ち』を持つ人が
だからこそ、この人のような人たちのためにも殺さなくてはいけない

無造作に死を振りまくアレを
――そう、それでいい――
うん、分かったよ『お兄さん』、見ててね
アレを殺して、アレに似たようなのも殺して
善人も悪人も関係ない、『人間』が住むべき世界を作ってみせるよ
――お前だけじゃない、俺も、他の人も、いる――
…うん、困ったときは助けてね
――ああ、任せておけ――

「『世に平穏を生み出そう』」

昔のことを思い出していた、私が剣を振るう決心をした時のことを
壁上から見える連合軍の兵士達は本当に戦争がしたいのだろうか
いや違う、本当は家にいたいはずなんだ、家族と、恋人と共にいたいはずなんだ
そんな人たちを、人が定めた法で、人が定めた通貨で、掻き集めて欲を満たそうとしている人間
同じ人間なのにどうして分かり合えないのか？
ずっと疑問に思っていて、『お兄さん』もそれは知らなかった
でも、答えは出ていた
欲だ、欲があるから、過ぎた欲があるからダメなんだ
連合軍を見る、あの中にこれを指示したものがいる、あの中に『アレ』みたいのがいる
「…吐き気がしてきた…」
胸中が、臓腑が、一斉に蠢くような不快感
戦場だからという理由では無い、そんなものが存在している、そんな理由から来る不快感
「すぅー…ふぅー…」
不快感を吐き出すように深呼吸をする

いくらか和らいだ
「なんや？あの月っちでも緊張するんか？」
ふと背後からかかる声
「霞…そういうものじゃないよ」
張遼、真名は霞、神速が代名詞だった将、華雄にその異名は取られてたけど
「なんやつまらん、たまには可愛らしいところ見せてくれたってもええのに」
「必要があればそうするよ、けど、今は必要ない」
そう、化け物どもが相手なんだ、余分はいらない
「ああ、そうや、呂布ちん復活したみたいやで？ついでにあのバカも」
「あら、そう、もう少しかかると思ったけど」
あの勘違い男、死ななかったんだ、残念
「なーなー、なんであの小僧にお熱なん？」
？私のことじゃないよね…ああ、恋のことか
「あれ？知らないの？」
「知らんがな、弱い上にええカッコしいのボンクラなんぞ興味もわかへん」
随分な言われようね…まぁその通りだけど
「それよ」

「はぁ？」
「カツコつけで弱いところが子犬だった頃のセキトに似てるんだそうよ」
「…そんだけ？」
「ええ、それだけ」
　少しの沈黙のあとふたりして笑う
「ぶっふ…！ダメや、堪えれへん…!!」
「ふふふ、恋らしいでしょ？」
　堪えられなくなってゲラゲラと笑い転げる霞
「あかん！あかんて!!腹捩れてまう！」
「まぁ、それは大変ね…恋はアイツの毛づくろいは大変だとぼやいていたよ？」
「ぶふぉ!!」
　お腹を両手で押さえてひぃひぃ言ってる霞を見下ろして
「笑い飽きたら準備に移ってね？」
　そう言い残し壁上から降りる、そろそろ私も準備しなくては
　後ろから、無理やー！とか聞こえたけど無視した

　さぁ、戦争をしましょう、化物共

一匹残らず殺し尽くしてあげる、私の、私達の理想のために
「ね、『お兄さん』」
――ああ、そうだな――
「…また頭の中のお兄さんと話してるの？月」
「うん、もう終わったよ、詠ちゃん」
見られてたことに気がつかなかったや、失敗失敗
詠ちゃんは私が『お兄さん』と話してるの見るのが嫌みたいだから
「準備の方は大丈夫？」
「うん、もう大丈夫…いつでも行けるよ」
能力も今日までにできる限り磨いてきた
自分ができることはやってきた、今日こそ、そう
「今日こそは、殺してみせるよ」
「月…」
そんな、悲しい顔をしないで詠ちゃん
これは私にしかできないことだから、だからやらなくちゃいけない
詠ちゃんに薄く笑いかけて、先へ進む
後ろからため息と同時にこちらへ駆けてくる足音

詠ちゃんは違うのに、私たちのような能力もないのに、最後まで私についてきてくれると言った、言ってくれた、言わせてしまった

私には責任がある、領主としても、アレらと同類という意味でも

――すまない、本来なら私がやることだ――

知ってるよ、『お兄さん』

――だが、君を殺したくなかった――

…知ってるよ、だから私は『お兄さん』が好きなんだ

――ああ、そうだな、私も好きだ、月――

クスリと笑い兵達の元へ歩を進める

さぁ、欲深き罪人を一人残らず処断しよう

さぁ、業深き化物を一匹残らず処刑しよう

「さぁ、戦争を始めましょう?」

連合軍が虎牢関を見渡せる位置に陣取ったあと、総司令官の鶴の一声で攻撃は明日へと延期になった

「なんでや、なんでここまで来ておあずけなんや！」

「仕方ないの～…でもちょっとだけ助かったの～！」

自慢のからくりでも見せたいのか憤慨する李典、安堵のため息を付く于禁

「…二人共、命令だ…少しは大人しくできないのか…」

「ここで野営ねぇ…奇襲されないか心配ね」

その様子に呆れる楽進、見えない敵に警戒する周倉

「来るぜ、当たり前のようにな」

そんな能天気な連中に警告だけはしておこうかね

「来るって…もう日は落ちてるで？」

「そうなの～敵さんだってご飯の時間なの～」

「馬鹿か、お前ら、陣地構築してる時を思い出せよ」
　揃って首をかしげる、大丈夫かこいつら
「陣地構築の時…特に何もなかったような」
「そうね、何も…あ、え？」
　気づいたかね、そうだよな、おかしいよな
「あからさまに見渡しがいいこの場所まで罠一つも仕掛けない、そんな馬鹿な話があってたまるかよ」
　あっと気がつく２人に、敵が来るとわかってぎらつき始める楽進
「なるほど、奇襲を仕掛ける場所に邪魔なものはいらない、と」
「随分と豪胆というか、大胆というか…」
「籠城してたほうが楽だってのにな、笑えるじゃねぇかよ」
　姉貴は多分気が付いてる、麗羽姉も今頃は準備の真っ最中だろう、他はどうかね…知ったこっちゃないが
「さて、日が落ちた、だから飯を食った、満足に動けるやつはどれほどいるかね？」
　黙り込む４人、そりゃそうだ、人間、飯食ってすぐは動きたいとは思わねぇからな
「…一刻以内に支度しときな、そうすりゃ、死ななくて済むかもしれねーぜ？」
　その言葉に慌てて動き出す４人

「さて、俺も行くか」
歩きながら考える、曹操の陣営は左翼側だ、右翼には袁術、中央前に劉備と公孫賛、その後ろに袁紹
ざっくり言えばこんな感じで野営をしている
さて、俺がこいつらの敵ならどこに奇襲をかけるか、戦力削りに左翼か？安牌の右翼か？どう考えても中央ってのは愚策だよな？
「だからこそここだ」
「…何しに来たのかな？」
中央を攻めれば両翼が包むように殺到して囲まれる、戦略としては下策にも劣る愚策
「奇襲を真っ先に受けるところに来ただけだ」
「…やっぱり、ここかな？」
だが、それは囲みをどうにもできない人間の、真っ当な人間が考えることだ
「ったりめーだ、お前さんでもそうするだろうに」
「だよね、うん、朱里ちゃん、戦闘準備しておいて」
「はわっ!?ほ、本当によろしいのですか!?」
「あわわ、桃華様!?お考え直しください!?」
「はぁ、じゃ、いいよ、私が動くから」

ちっこいの二人が慌ててるの眺めながら虎牢関の方角へ向き直る
月が出てない、新月のせいで真っ暗闇だ、虎牢関すらも見えはしない
「なぁ、劉備よぉ」
「愛紗ちゃんは左翼に行って！鈴々ちゃんは右翼側!!…なに？忙しいんだけど」
「来たぞ」
見えはしないが、分かることはある、闇夜に姿を隠せても音までは隠せやしない
無数に風を切る音と共に、真っ黒に塗られた矢が殺到する、完全に奇襲を仕掛ける気だったようだ
俺はそのまま受ける、劉備のやつを庇ってやろうかと思ったが忠告した時点で十分だったようだ
「…落ちろ」
その言葉だけで劉備軍に向けられた矢は地面へと吸い込まれるように落ちていった
「おい、俺のところにめちゃくちゃ来てるんだけど」
俺のところに来てたのはそのままだった、夜に出歩いたスティーブみたいになってる
「そのまま死んじゃえば？」
めっちゃいい笑顔で返された、畜生…俺の周りはこんな奴ばっかだよ
前へ向き合おれば、騎馬部隊がこちらへ向かってるのがよくわかる

今更、奇襲だー!、なんて声が聞こえてくる
劉備はいつの間にかいなくなっていた、代わりに
「やぁ、久しぶり」
「おお、黄巾以来かい、七夜モドキ」
モドキとはひどいなぁ、と笑って流すモドキ
「ここは共闘と行かないかい?流石に、さ」
「はっ!共闘ねぇ?まぁ、いいぜ、巻き込まれないように合図ぐらい出してやるよ」
「そいつはいい、楽ができそうだ」
ふざけ合っていればすぐ目前に馬の足、踏み潰す気か
「馬鹿か、てめぇは」
ボウッ!っという音と共に馬の腹ごと騎手を拳で打ち抜く
吹き飛んでいく馬にぶつかり後続がコケて落馬していく
「はっはー!いい眺めだ!!」
「全く無茶苦茶だね」
そう言いながらモドキの少し後ろには騎手ごとバラバラになった馬が2頭
「てめーも大概だろうが」
「いやはや、下手糞でお恥ずかしい限りでございます」

１６分割だっけ？１７だっけ？忘れたがそんぐらいにはバラされている
「いや、お見事、俺じゃそこまで綺麗にバラせねぇ」
「お褒めのお言葉、光栄の至りでございます…なんてね」
なんだろう、コイツと一緒にいるのも悪くない気がしてきた…あぁ、セリフの言い回しがネタ臭いからか、いいキャラしてるなぁーおい
「さて、こっからだな」
騎馬隊はここの突破は無理と見たのか左右に分かれていった
そして奥から出てくる騎兵が３つ、見知った顔だ
「よー、おひさー、元気してたー？…潔癖症のクソアマが」
「ええ、そちらもお変わりなさそうで…業突張りの下衆野郎」
「…びっくり」
「と、董卓？どうしたんだ？」
「おや、エミヤモドキに呂布もか…少しは退屈凌ぎになりそうだ」
各々が勝手なことを言いつつも、既に間合いだった
七夜モドキがエミヤモドキと呂布へ向かっていく、俺と月はその場に残り対峙している
「こっちは七夜、そっちはエミヤ…最強っていうおまけ付きなんだ、頑張って生き延びろ

よ」
「…！七夜…ってことは浄眼…まだ勝ち目はある！」
「…失礼」
　あっちは戦闘を始めたようだ、血の気が多いこった、俺が言えた言葉じゃないが
「さて、久しぶりに会ったとはいえ、なんか話すことでもあったかい？」
「ううん、何もないよ？言いたいことはあったけど」
「奇遇だな、俺もだ」
　フフフ、クックック、と互いに笑い合う
「「此処で死ね、――化物／酔っ払い――!!」」
　互いに告げると同時に能力を発動する
　日は落ちたばかり、夜はまだまだ永く続く

死ぬ者、殺す者

――狂っている

諸葛孔明、龐統士元は言葉を交わすことなく意思を通じた

なるほど、夜の奇襲は定石とも言える、黒く塗られた矢も闇夜では確かに有効だろう

では、目の前の光景はなんとする？

『堕ちろ』、と一声かけた主君の言葉と共に、地へと落ちた矢はどうやって説明する？

駆け抜けてきた騎兵を、瞬く間もなく切り刻んだ、あの気さくな青年をどう表す？

たった三千余りの騎兵のみで、正面からの奇襲を仕掛けてきた敵は？

それを読み切った上で『中央を空ける』鶴翼之陣を敷いた主君の心情は？

――何もかもがわからない、故の恐怖、故の狂気――

「あ、ありえません…」

「うん、ありえないよ…」
目の前の光景に抱いた純粋な感想
その思わず口づいた言葉に返したのは他でもない主君だった
「なにが？奇襲のこと？矢を落としたこと？それとも、あれかな、七夜君が思った以上に化物だったってこと？」
気が付けばいつもの様に微笑んで、こちらを見下ろす主君がいた
「え、あ、う、その…」
「あ、もしかして鶴翼を選んだ理由かな？」
誤魔化すように首を縦に振る二人
本当に聞きたかったのは他のことだった、だがそれを聞いては二度とこの人を主君と思えなくなってしまいそうで聞けなかった
「うん、簡単だよ、中央突破して欲しかったんだよ」
「「え？」」
「んー…？あー、そうだね、二人共優秀な上にいい子だもんねー」
そう言って二人の頭を撫でる
まるで、出来の悪い子供をあやす母親の様に
「でも、今回のことでわかったよね？」

「私は目的の為なら、どんな毒でも飲み干してみせるよ」

そう言い放ち、勢いよくぐるりと振り向く

気が付けば敵の騎兵の数騎が迫ってきていた

二人は互いをかばい合うように抱きしめ合う、口からは小さく悲鳴が出た

例え英知に優れようとも、棒きれ一つすらまともに振れない小娘だ

暴力こそ最も恐れるものであり、忌避するものであった

しかし次の瞬間に見たものはおよそ人間ができる芸当のものでは無く

「馬の進行方向とは逆に、首だけに負荷がかかるとどうなると思う？」

数にして五か六かその全ての『騎手のみ』の首が反対へと折れ曲がっていた

「答えはこちら！残念だったね～」

いつもの様に、微笑みながらそう言葉を紡ぐ主君

そう、いつもと変わらないのがとても恐ろしかった

私達はその笑みを絶やさぬために自分の力を振るっていたのか、と

「…騙す気はなかったんだよ？」

こちらに背を向けて、心情を読み取るように語りだす

「けどね、私の夢は知ってるよね？…その為にはこうするしかないんだ」

夢――皆が笑顔でいる世界――
「私の夢はね、ずっと続けばいいなんて思ってない」
「私の夢は、ほんの一瞬、光が瞬くような一瞬でいい」
「ただの一瞬だけ、皆が、全ての人間が笑顔になればいいの」

――私という、狂気の王様が死んだ時だけ、その夢が叶えばいいの――

思わず息を呑んだ、ただの理想だと思っていた
本気で、真剣にその理想を語る、だからこそ着いていこうと思った
だが違う、この人は違った
「だから、その時までには、さ」
覚悟があった、私達には足りなかった、足りなさ過ぎた覚悟が
「どうか私のことを」
だから、言わないでください、そんな顔で、あなたは不器用な人なんだから
「嫌いになってね？」
微笑みながら、泣くだなんて、器用なことをしないで

「おっと、危ない危ない」
　語る口調は落ち着いたもの、目にも映らぬ斬撃を彼はひょいと軽々しく避ける
「…ッ!!」
　斬撃を繰り出すは、天下無双と謳われた呂奉先
　そして、それを避けるのは
「夜目は効く方でね、随分とまぁお速いことで」
　避けながら軽口を叩く、七夜と名乗る青年
　縦横無尽に周りを駆け、呂布の一撃を避け続ける
「流石は天下無双、さっきの贋作者とは訳が違う」
「…黙れッ!!」
　今、彼は無手であり、手元には愛用の仕込み短刀は無い
　これには訳があり、遠巻きにこの戦いを見てたものならば短刀の在処を知っている
「しかし、まぁ、俺もまだまだってところかね？自分の武器を壊されるとはね」
　贋作者を速攻で仕留めたまでは良かったんだがね

青年は避けながらも、自身の行いを深く戒める
戦闘開始前から相手が気にしていたような、魔眼的な物は自身には無い
あるのは、すぐに作れるような仕込み短刀と常人ならざる身体能力だけだ
相手は二流どころかドのつく三流だった、眼を気にしすぎて投げた短刀に反応できてはいなかった
呆れるほどにうまくいった、そのまま極死を決め、短刀を回収して次に入るはずだった
…が、そこまではうまくいかず、贋作者の最後の意地というべきか…
「『我が骨子は捻じれ狂う』、ね…」
短刀は贋作者の眼に突き刺さったまま螺旋を描くように捻じ曲がった
現状の敵を前にして、あれを引き抜ける余裕は無い
そうこうしているうちにも、死の一撃――いや、暴風とも言うべきか
自身でなければ見るも無残な肉塊と成り果てるだろう、暴風を如何に回避するべきか
「殺す、お前だけは…!!」
「アレに何を求め、如何なる想いを抱いていたかは知らないが―」
道中で殺した騎兵の槍――その穂先を折り鉄片と化した物――の刃の部分のみを右手で握りこむ

無論、握りこんだ手中から血が流れ落ちるが――無用と断ずる
「殺すのは俺の専売特許でね。――斬刑に処す。その六銭無用と思え」

そして、荒れ狂う暴風の最中に、青年は笑みを浮かべ駆ける

横薙ぎ――下がるな、受け流して掻い潜る
振り下ろし――避けるな、受け止めつつ打点を逸らす
振り上げ――呑まれるな、柄を足場にして前に出る
斜め振り下ろし――焦るな、身体を捻り横へと避ける
横薙ぎ――好機だ、振り切られる前に駆けて首を狙う
読みか、反応か、放った一撃は柄で防がれた
ギィィンと残響音を聞きつつ次へ
横薙ぎ、振り下ろし、振り上げ、横薙ぎ、振り下ろし――
その全てが致死の一撃、しかし青年はその全てを避け続ける
肉を切る音も、骨を砕く音も聞こえず
ただ、空を切り裂く音と金属の残響音が聞こえるばかりである
「…ッー！いい加減に…！」

「悪いね、もう少し付き合ってもらおうか…何、夜は長いんだ、焦る必要はない」
まるで踊るかのように繰り広げられる武闘、互いに決定打が打てぬままに、音だけが連鎖して鳴り響く

そして、そこに一手が加わる
「…待たせた、恋」
七夜を襲う横合いからの斬撃、低い姿勢を保ちつつ後方に下がることでギリギリ回避する
「おやまぁ…脳天串刺しにされたら素直に死んでおけよ」
——吸血鬼でもあるまいし
そう、溜息をつき前を見る
そこには貫かれた跡すらも無いエミヤモドキがいた
「悪いがそう簡単には死ねない身でね」
よく見ればエミヤの体は僅かに青白く発光している
「ああ、…そこまで忠実に再現したのか、それでも、致死まで防げるものか?」
「そこまでバラす訳もないだろう、こちらは二流にも劣る三流でね」
ああ、これは返そう

言葉と共に投げつけられる捻じ曲がった短刀
鉄片を捨て、右手で受け止める
鉄片を握っていたほうがまだましと思える痛みが手の中に広がる
が、無用、と即座に感覚を切り捨てる
「さて、仕切り直しと行こうか」
構えるエミヤと呂布、呂布は落ち着き、エミヤには今までが演技かという程の威圧感が生まれている
干将・莫耶と呼ばれる白黒一対の夫婦剣と方天画戟を向けられる七夜
他の転生者ですら圧倒するような威圧を前に、そこには深い笑みがあった
「――ああ、面白い、実に面白い」
「ようやくだ、生きている、と実感できる、そんな戦いに巡り会えた」
「感謝するよ、心の底から、さ」
構えた二人に対して七夜はゆっくりとしゃがみこみ、両の手を交差し地面ギリギリまで下げる
――吾は面影糸を巣と張る蜘蛛
――ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ
瞬間、七夜の姿は消える

否、目に映らぬ速度で二人の周囲を飛び跳ねる
「恋！後ろを頼む!!」
「…わかった」
背中合わせとなり、構える呂布
そして静かに目を瞑るエミヤ
「…お前もあいつも、勘違いをしている」
その両手の剣を地に刺し、腕を組む
「俺が求めたのはエミヤなんかじゃない」
そして静かに目を開く
「求めたのは俺の『起源』だ」
瞬間、エミヤの頭上の空間に金色の穴が開く
穴は瞬く間にエミヤと呂布の周囲に展開されていく
「『王の財宝』」
そこから飛び出すのは無数の武具
かつての英雄達が手にしたであろうものの原典
「…なるほど、ね」
――の贋作

瞬く間に飛び出した武具が破壊されていき、最後には七夜が立っていた
『起源』ね…納得したよ、さっきの復活も君の『起源』によるものってことだ」
血だらけになった右手を揺らし、左手をズボンのポケットに入れながら笑う七夜
「俺の予想なら君の『起源』は『模倣』ってところかな…一体どれだけ殺してきたのやら」
「お前には言われたくないさ、身体能力だけで落とせる代物じゃない」
そしてまた武具を打ち出そうと、空間に穴があいた瞬間――
「――当たり前だ」
エミヤの眼前には七夜がいた
「・・・ッ！」
「一体お前は『七夜』というモノをなんだと思っているんだ？」
何をするわけでも無く、話し始める七夜
『鬼を殺そう』、その思想のみで長年鍛え上げてきた一族」
「狂った思想のもと、狂った方法で血を濃く引き継ぎ続けた一族」
ギシリ、そんな擬音が聞こえてきそうな笑みを浮かべる七夜
「その果て、極みがこの俺だ、人間如き今更相手にもならない…だからこそ求めたのさ」
瞬くことすら許さずにそこから消え
「だけど、まぁ」

面倒くさくなってきたんでね
そしてその場には周囲の合戦の怒号のみが響き渡る
「・・・逃げられた、いや、見逃されたか」
周囲に七夜の気配はなく、そっとため息をつくエミヤ
「世の中、化物だらけだ・・・俺もそうだが・・・」
全く、どうなっているんだか――
つぶやき見上げた夜空は新月のせいもあってか、星がよく見えた

空を見上げるエミヤを高台から見下ろし、ため息をつく
「全くどうなっているんだか」
典型的な小物だと思っていた、思い込まされていた
実際はどうだ、多数の転生者とであってきたがその中でも一等のモノ――殺意だった
「今の状態じゃ、良くて相打ち…かな?」
そうなればいいなと、希望的観測を打ち立てる
呂布にエミヤモドキ、呂布にさえ気をつけていればいいと思っていた
実際はどうだ、気をつけるべきはエミヤモドキだった

致死の攻撃を受けても蘇る能力、横合いからの攻撃も自身でなくては避けきれなかっただろう

何よりも、一度殺されたというのに向かってくるあの胆力

「…この時代で生き延びてる時点で警戒すべきだった、か」

ここに至るまでに一体どれだけの転生者が『目覚め』、どれだけが『眠った』ことか

「うん、考えてもしょうがないし、戻るかね」

――いつまでも子守をサボるわけにもいかないしね

何度でも、繰り返す

日が落ち、月の光もない新月の夜
星明かりの下、兵士の怒号が響き渡る
なるほど、闇夜に、しかも新月の夜に紛れての奇襲は確かに有効だろう
最初に射掛けてきた矢を黒塗りにしたのも、鎧も同じようにしたのも
「がぁぁぁ!!!死ねぇ!!!」
「待てっ!!俺は味方だ!!」
だが、乱戦となれば無意味となるだろう
こういった奇襲は、速やかに駆け抜けなくてはさして効果はない
乱戦となり、味方同士で争うのも道理
見えないのだ、隣に立つ人間の顔すらも
最初は明かりを目指せば良いだけだったが、そこからは違う
一糸乱れぬ連携で一度強く当たり、速やかに撤退する
夜間の奇襲とはそういったものだというのに
「うぉぉぉぉ!!!!!」

「…はぁ、全く」
襲いかかってくる兵士、ため息をつく女性
女性はほんのわずかに星の光を反射する金髪を左手でかきあげ
ヒュゥン
と、軽い風切り音と共に右手に握った細剣がブレた
襲いかかった兵士はそのまま女性の横をすり抜け倒れた
倒れた兵士をよく見れば、首にうっすらと赤い線が浮かび上がっている
「流石ですね、麗羽様」
「見てたのならあなたがどうにかなさいな、猪々子さん」
ごろり、と倒れた兵士から転がる首を横目に
頬を掻きごますような仕草をしながら猪々子は答える
「いやいや、あたいが手を出す前にやられちゃどうしようもないですよ」
「…はぁ、後でお仕置きですわね」
ええ!と心外だと言わんばかりに驚く猪々子
はぁ、と心労を吐き出すようにため息をつく麗羽
「こんなところにまでこのような雑兵が来ているのですもの、当たり前でしょう?」
「それに関しちゃ斗詩の役割じゃないですかー!」

横暴だー!と騒ぐ部下を無視しつつ麗羽は問いかける
「…それで、なぜここまで押し込まれていますの?あと、斗詩さんは何をしているのかしら?」
「あらー…無視ですか…っと、えぇと、斗詩の方は中央ぶち抜かせた劉備軍を殲滅できるよう弓兵を手配中です」
馬鹿な味方は敵より怖いですからねーと続ける猪々子
「なら、斗詩さんに伝えておきなさい、『馬鹿な味方を殺すより哀れな敵に慈悲を』と」
敵の弓兵はまだ残っている、この奇襲で見かけたのは騎兵と歩兵のみ
切り捨てた敵兵の装備もまた弓兵のものとは考えにくい
「え~?それ、あたいが行かなくちゃダメですかね?」
「あなた以外に斗詩さんの場所を把握してるものが他に居らして?」
言われて頬を掻く猪々子
なるほど、確かに彼女の場所を把握してるのは自分くらいだ
まぁ、仕方がないかと思い自身の主君が続く言葉を待っているのに気づき口を開く
仕方がない、と思うあたり、彼女の性格が伺える
彼女とて軍を率いる身であり、決して伝令を行うような立場では無いからである
「で、なんで押し込まれてるかっていうと…兄貴のせいですかね」

「あら？立華さんがここに？」
「はい、ま、そのせいで混乱に拍車がかかっちまって、どーしよーもねーってとこです」
猪々子さん口調、と麗羽が注意し
うげっ、と猪々子が苦い顔をする
そんなやり取りをしていると、二人の真横に黒い塊が音を立てて飛来してきた
二人は驚きもせず、目を凝らし飛来してきた物が何であるかを確認する
「…馬？」
「正確には馬の胴半分、ですね」
そして麗羽は奇襲を受けてから3度目となるため息をつく
「…相変わらずですのね、立華さんは」
「相変わらずですねぇ、兄貴は」

「かぁぁぁ!!!」
「シッッッ!!!」
シャラン、と言う金属同士を擦り合わせた音がその場には何度も響いていた

立華がその身より生成した青龍刀を振るう度に、月は振るわれた青龍刀よりも早く手にした剣を振るい
青龍刀の斬撃の軌道そのものを書き換える
およそ、その技は控え目に言っても人が振るうにしては余りにも人間離れした技であった
立華が振るう剣は、常人が振るう術理の範疇を超えはしない
しかしながら、彼が化物とされる所以はその膂力である
振るう剣が例え凡百の者たちのそれに毛が生えた程度のものだとしても、彼はそれを己の剛力のみで神速の一太刀へと変える
しかし、その一太刀を見切れるものがいたとすれば、彼の剣に天賦の才があるようには思えないだろう
実際、月にはそう見えた
剣を振る動作がわかりやす過ぎる
その速度や威力は確かに驚異だが、一つ一つの動作を見れば回避が容易いのだ
故に予測できる、故に――――
シャオン
――――斬撃を書き換えれる

「だぁぁ！しゃらくせぇ!!小手先ばっか上手いのは相変わらずかよ!!!」
「力任せなのは相変わらずですね？何も進歩していないのがよくわかりますよ？」
抜かせ――口の中でつぶやき、更に斬撃を加える
ジャオン
書き換えられる斬撃、その音に濁りが出始めてきた
相手が達人であれ、同じ化物であれ、『俺は負けない』
超える技量を持つならば、それを上回る剛力でねじ伏せる
超える剛力を持つならば、それを上回る物量でねじ伏せる
超える物量で来るのならば――その全てを喰らうのみ
「どうした!?疲れてきちまったか!?いいんだぜ？いつものように逃げ出してよ？」
言葉を発しながら青龍刀を投げつけ新たに片刃の大剣を取り出し斬りかかる
「いえ、今回はここで、確実に仕留めます…ここは人間が住む場所であり、お前のような化物はあってはならない」
その斬撃を真っ向から受け止める月
持っていた剣は名剣と呼ばれるものではあるが、それでも身の丈程ある大剣を受け止めるにしては不足していた
だが、彼女はそれを受け止め――次の瞬間には立華の首が飛んでいた

「――――出したな。クソッタレが」
即座に修復された頭から発せられたのは苦々しい悪態
超える技量を持つならば、それを上回る剛力でねじ伏せる
超える剛力を持つならば、それを上回る物量でねじ伏せる
超える物量で来るのならば――その全てを喰らうのみ
――――だが、そっくりそのままそれを返されたら？
「ええ、出させてもらいましたよ？どうしますか？逃げますか？」
クスクスと笑う少女、場所が場所なら一枚の名画ともなる微笑みだが
場面は戦場、それも殺戮が行われていたであろう爆心地である
「お兄さんがくれた、『反射』の業、超えれるものなら超えてみなさい」
微笑みはそのままに、斬りかかる月
「…舐められたもんだ」
そしてその斬撃を1歩踏み出しわざと深く体に埋めさせる立華
それは剣の根元まで深く埋められた
「ッ!?」
埋めた剣をそのままに体を溶かす

どろりと溶けた体はそのまま１０歩ほど離れたところで人の形を作り始める
「これで終いだ、クソガキ」
解放された剣は根元から、長年雨風に晒されたかのようにボロボロに朽ちていた
「俺の血が付着した部分だけ、時間を加速させた、面白いだろう？」
ぐにゃりと、貼り付けたような笑みを浮かべる
驚愕に染まった顔を見るのはいつでも面白い
「そんな…!?業は一人に一つじゃ…!?」
「阿呆、今まで見せなかっただけだ、俺はどんなことでもやってみせる」
大げさに両手を開きながら答える
「お前の能力は何度も見た、お前はいつも能力を使うときは必ず『持っているもの』に俺の力を当てさせていた」
「もっと言えば、発動は一瞬のみ、ジャストガードみたいなもんなんだろ？」
「だったのならば、見えても反応できない一撃で仕留めりゃいい」
ふぅとため息をつき、右手で新たに生成した大剣を担ぐ
「じゃあな、それなりに楽しかったぜ」
担いだ大剣を横に構え突進する
一見ただの突撃だが、行うのは人ではなく化物

瞬く間に１０歩の距離を詰め
「あ――」
唖然としてる少女へと大剣を振り抜く

が、手応えは無し
「…ちっ」
その場には少女は無く
周りを見渡してもそれらしき影は見当たらない
「…あー、めんどくせぇ、また逃げたのかよ」
このように逃がすのは初めてではないが、いい加減に仕留めておきたかった
だが、今回の戦でわかった、能力者が如何に多くこの世界に放り込まれていたのかを
「ふざけやがって、そんなに地獄で踊る様が見たいってのかよ」
思わず口に出した言葉は、少なくなってきた戦闘の音に溶けて消えた
「…だけどよ、今回ばかりは逃げちゃダメだぜ？潔癖症の月ちゃんよ？」
大将が戦場からいち早く撤退する、兵士たちにとっては敗北よりひどい結果となるだろう

「さぁて、流れ出した水はなかなか止まらねぇぞ？」
クカカ、とのどを鳴らすように笑う
愉快でたまらねぇ、結局ガキのまんまだ
どいつもこいつも、戦争ごっこ止まったままだ
「そんな温い訳ねぇだろ、一等人間の殺し方考えこんだ国の、戦争だぜ？」
ああ、愉快だ、人間が大量に死ぬ
死ねば死ぬほど、俺は死ななくなる
「化物を殺すのはいつだって人間…ね？よく言うぜ」
――俺が死ぬとすれば、俺が生きるのに飽きた時だけさ――

…どうして、どうして…
「どうして、なぜなんですかお兄さん…」
―あのままでは、彼に飲まれていた―
「っ！だとしても！今度ばかりは…!!」
―理解も許しもいらない―
「私が！私がいなくなったら!!」
―だが、彼を止めれるのは君だけなんだ―

「…それは」
―本当だ、これは嘘でも何でもない―
―『反射』は彼自身にも影響する―
―今回で分かったんだ、後一手足りないんだ―
「後一手…」
―すまない、耐えてくれ、月―
「…謝罪はするんですね」
―無論だ、本来は私の罪なのだから―
「わかりました、今は耐えます…だけど」
―ああ、必ず―
少女は一人、城壁の上にて空を見る
月明かりはなく、星空だけが見える空を
―――ごめんなさい